

井田 絃聲氏 著
小説
新式奥様
東京大學館發行

258
746

094133-000-3

特12-938

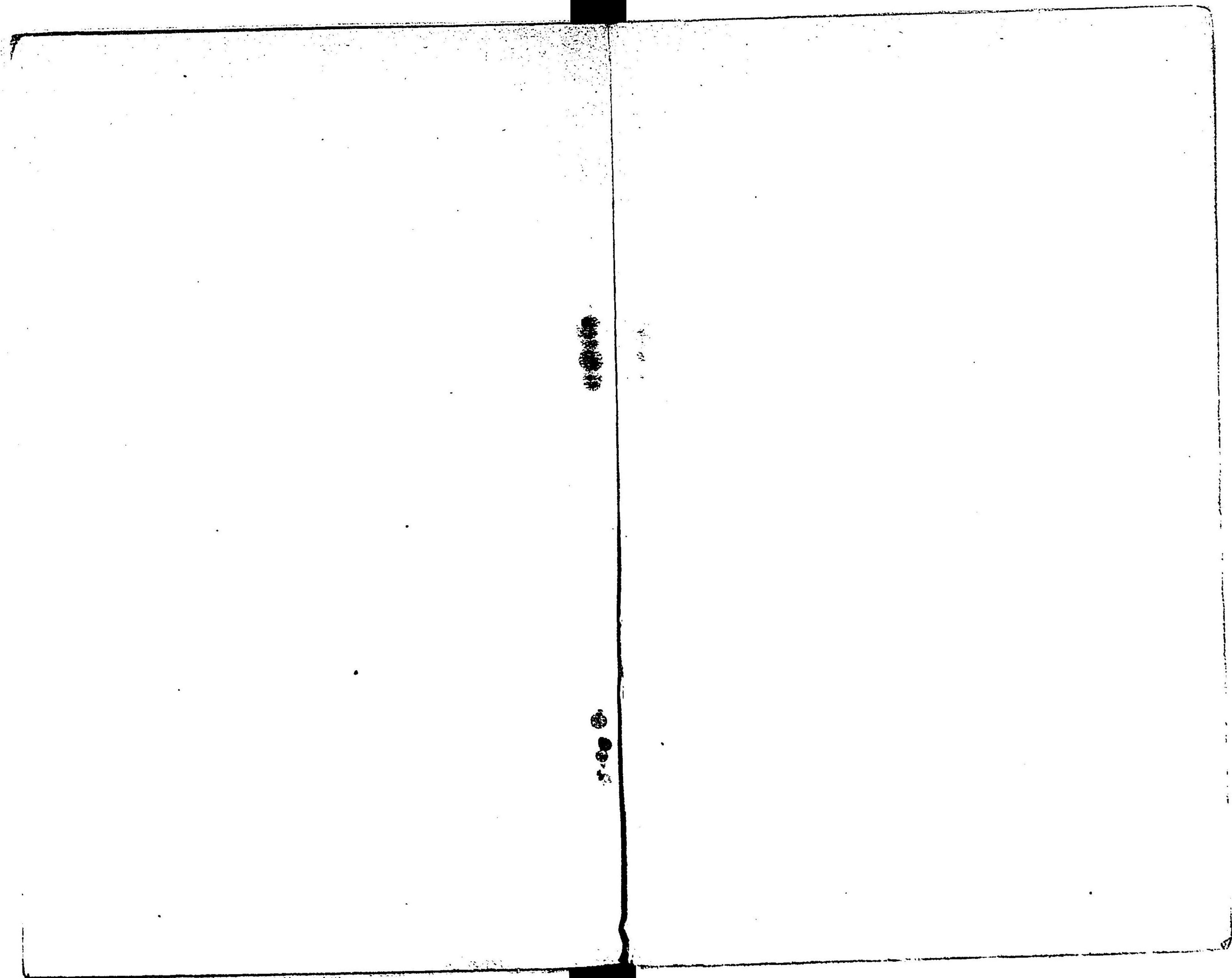
新式奥様

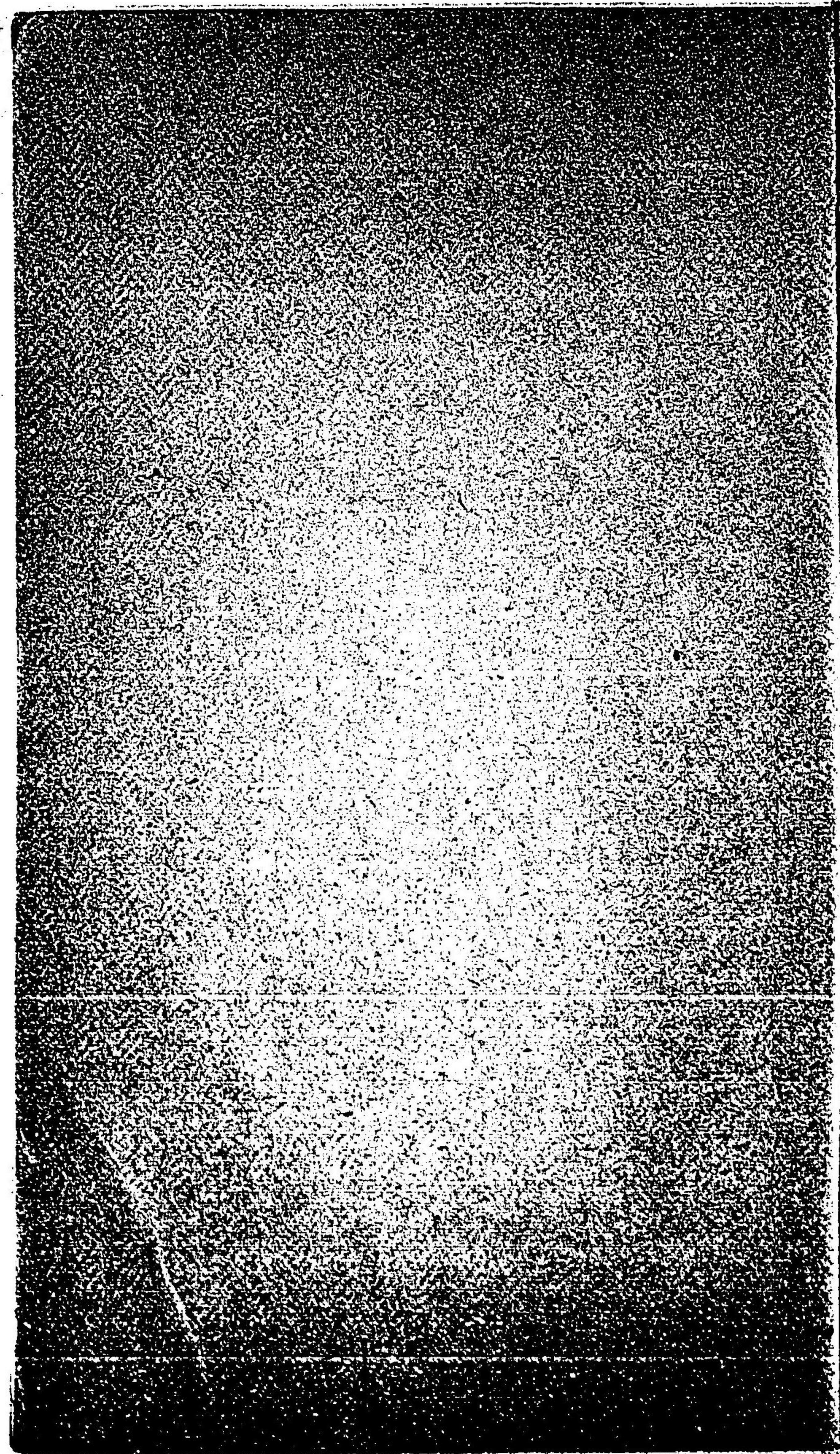
井田 絃聲/著

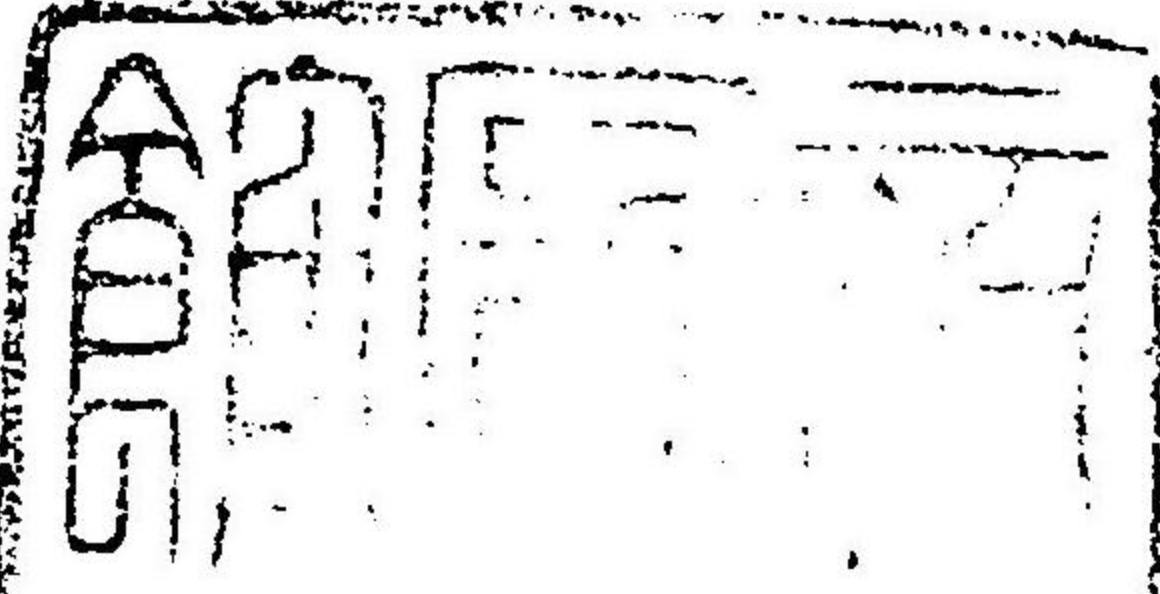
M41

DBQ-1613









はしがき

子爵家の令嬢侯爵家の嫡子と婚約成り、華燭の典近きにありて突然
 行術不明となる、新聞紙は諸説紛々或は不義の爲めといひ、或ひは
 結婚を嫌ふてと唱へ、揣摩憶測を逞うす、令嬢の親友嫡子の刎頸各
 自工夫を凝して搜索に向へども皆その効なし、此に新橋の名妓あり、
 嫡子と淺からざる關係ありと吹聴して世人を驚かす、親戚朋友皆こ
 れを信じ令嬢の出奔これに因すと説く豈に計らんやこれ令嬢と名妓
 の計畧に依るものにして名妓の怪腕は愈々人の意表に出づ、已にし
 て令嬢と嫡子との會見となり、令嬢出奔の眞意は嫡子の爲めに撰
 舉運動をなせしにありといふこと分明す、寔に讀者をして迷はしめ

明治
 41 8 31
 内交

疑らしめ、訝らしめ、憂えしめ、驚かしむ。大團圓に至りて肩の疑りを一度に解かしむるの感あり。

四十一年八月

清香山人識

目次

(目次)

(一)	不思議な噂	一
(二)	いよ／＼疑問	五
(三)	社の秘密	九
(四)	夢のはなし	四
(五)	怪しき來狀	一六
(六)	天祐々々	二三
(七)	君大變々々	二七
(八)	徹夜の覺悟	三三
(九)	眠むい／＼	三八
(十)	同じ目的	四四

(十一) 追駈けろ 九八

(十二) お嬢様 一〇二

(十三) 好きよ方 一〇七

(十四) だんく怖い 一一二

(十五) 手がりの書面 一一五

(十六) 執事の出馬 一二〇

(十七) 果してそれ 一二四

(十八) 百日の説法 一三〇

(十九) 袋の鼠 一三五

(二十) その空室 一四〇

(二十一) 畜生殘念 一四五

(二十二) 御鴨長過ぐる 一五〇

(二十三) 俄風雨 一〇三

(二十四) あら常さん 一〇八

(二十五) 假の不義者 一一三

(二十六) どうしてこんな 一二六

(二十七) 土組の見合 一三三

(二十八) 同じ宿 一四〇

(二十九) 今の車 一四七

(三十) 危ない！ 一五三

(三十一) 艶な文 一五九

(三十二) お返辞を 一六五

(三十三) 棧橋の女 一七二

(三十四) 捜しましたよ 一七八

(三十五) 粹な父侯上 一六

(三十六) 同じく下 一七

(三十七) 落籍の評判 一七

(三十八) 覺悟の躰 一七

(三十九) 侯爵と競走 一七

(四十) 十錢の客 一八

(四十一) さういふ方 一八

(四十二) どなたにです 一九

(四十三) 月の光 一九

(四十四) 江の島の使 一九

(四十五) 極内々 一九

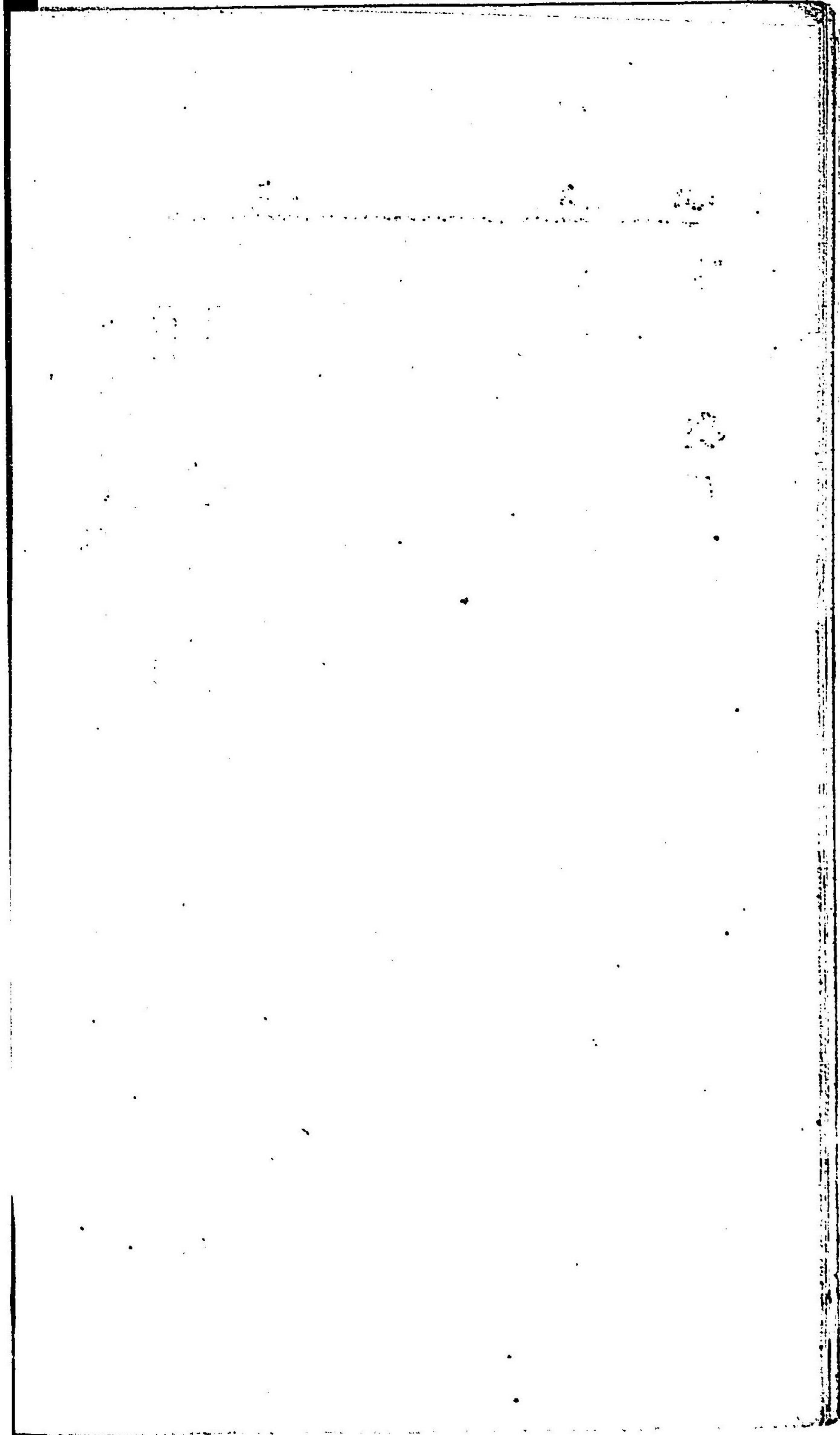
(四十六) よく味が書ける 一九

目次終

(四十七) いゝ種 二〇

(四十八) 五百里子の行方 二〇

(四十九) 満都の驚愕 二〇





持12
938

(一) 不 女 事 不

小説 新式 奥様

井田 弦 聲 著

一 不思議な噂

盛岡家の愛嬢 五百重子の行方が知れなくなつた。

學問も人並より勝れて、技藝といひ品行といひ、あつばれ子爵家の令嬢として、世から唱はれてゐた、今年二十二の五百重子が、奈うしてその行方を暗ましたか、何人も疑ふ處である。二三の新聞紙は、結婚一條が本人の不服から、この舉に出たのだらうと報じた。併し、その前日定まつた、狩野侯爵の令息との婚約にも、五百重子自ら進んで、平常にないそはくした顔色さへあつたと、側女なにかしの談話を載つたのもあつた。何しろその真相は、容易ならぬことがあるらしい。

今日は、盛岡子爵家の門に、この事件に就いて、何物もか得やうと、新聞社や通信社の記者達が、朝から切りなしに出入りしてゐる。

應接室では、執事の黒田六蔵といふ、今年六十になる老爺が、一々こゝへ應接してゐるのだ、要領は、昨日の午後二時頃、抱への俥に乗つて出たがり、今以て歸邸なされぬといふより外に、何の得る處もないのである。がこれだけで満足せぬ連中は、この前の舉動、曳いて出た俥夫の歸邸有無を問ふ。前の舉動は平常に異ならず、俥夫も今以て歸らずと、これだけより外に答へない、事實それ以外に六蔵は知らない。

今、門を出た某新聞の記者らしい男は、一人考へながら、子爵邸の塀に就いて右へ曲ると、出合頭に、『橋本君』と滑らかな聲を浴せかけられた。

『わゝ？』と仰ぐと、其處に髭の薄い、若紳士が、洋服で立てゐる。

『奈うだい、少しは要領を得たかい。』と、若紳士は、考へた橋本君の顔を見て、

にやりとする。

『いや。』

『いや、などは情ないね、あの黒田執事は僕の君に話した以上語るまい。』

『語らない。』

『其處だよ。』と少し笑顔をする。

『何處だい。』

『車に乗つて出たらう、五百重子が。』

『うむ。』

『その車は誰が曳いて出たい。』

『車夫さ。』

『その車夫といふものに、君は疑念をかけないかね。』

『車夫に？疑念？』

「あらう。」

「だつて君、あの令嬢が、車夫なんか……考へて見ても僕にや。」

「だから君は、買ひかぶるのだよ。令嬢は女だせ。それは知つてゐるだらうね。」

「そんなことは君に聴かなくたつて分つてるよ。男の令嬢があるものか。」

「而も若い女だ。」

「併し、近々結婚しやうといふ嬢が、何を好んで車夫なんか。」と橋本君は一寸見る。

「それが君の若い處さ。」

「奈うも解らないぢやないか。令嬢ともいはれるものが、車夫なんかを相手に……況して、有名な徳行家の令嬢が、そんなこと出来る理由がないよ。」

「處がね、何ともいへないのだ。僕は今朝、邸内にゐる車夫の女房を訪れて、車夫常造の品行に就いて聴得たことがあるのだ。」

「そんなことだ。」

「君が疑はない車夫のことだから、僕がかういつても信せず、他の方を探つた方がよからうさ。僕は僕で、これから……。」と少しづらかして、若紳士は橋本君の顔を見てゐるのだ。

「併し参考までに。」と橋本先生も、少々乗出して、聴かうとする。

「矢張聴きたいのだね。」

(二) しよく疑問

橋本君といふ男は、眞顔になつて、「聴きたいよ。秘密にして、誰にもいはないから話し給へ、僕だけに。」

「は、は、違がい、話だね。」

「で、車夫の女房が何といつたい。」

「飛んでもないことすつて。」

「それだけかい。」

「それだけさ。」

「何だ詰らない。」

「それで、女房の曰くさ、亭主はもう六年ばかり前から、このお邸へ来てお世話になつてゐるのだと。」

「ふむ。六年前、それで。」

「それで、何時も嬢さまや、お坊ちゃん、お学校の學校へお供するより外に用のない時で毎日御門内を掃除する位なものだ。處が何時だったか、あの五百重子嬢のお座敷へ招かれて、お茶を御馳走になつて歸つて来たことがあつたさうだ。」

「何時頃だらう、それは。」

「何でも昨日あたりのことだらう。何しろ餘り身分の違ふことだから、今度のやうなことがあらうとは疑へなかつたが、併し、奈うもその時から夫の常造は無闇と當り散らして、お嬢様のやうな方はないなどと、女房を頗る心配させてゐたのださうだ。」

「へえ、さうかね、さうすると、いよく今度の事件は、仲夫に定つてゐるね。」

「さう早呑込をしてはいけないよ。」

「まだ何かあるのかい。」

「それでね、女房は今年三つになる小兒を抱へて、常造の行方を探して出かけたのださうだ。するとね、その女房の留守に端書が一枚忽ち込むた。これは常造の手續ではないが、常造と日頃仲のいい友人の、今は何でもさる貴族の家の書生をしてゐる男らしいさうだ。途中より、常造とあるので。その文面は、今年中は少々都合が悪くて歸れないが、來年は歸る意だ。お邸の方へは宜しく申上げて、お前は何か御用を仰付かつてゐて呉れ。その換り、來年はお前を今迄のやうに仲夫の女房ちや置かない、これだけで最後に由坊……これはその子を……大切に育て、くれ、とかう

あるのだ。」

「はい、さうすると、その常造といふ車夫は確かに焼死したね。」

といふ、處へ、二三人の、これも記者らしい風貌の男が、此方へやつて来た。

「つまり、幽霊の正躰は枯尾花だね。」

「さうだ、吾輩の臆側は誤らん意だ。」

「さうすると、行衛不明も一寸不怪しいのだなあ。はいあ。」

「併し、この邸には確かにをるまい。」

「警察の方へも搜索願ひを出したといふ位だから。」

「それはさうだが、その搜索願ひが何とも知れんのだて。」

こんな話をして、此方の二人を死目に一群は行過ぎた。

「何だか少し怪しくなつて来たね。」と、橋本君は、若紳士の顔を見る。

「いや、あんな説に屈せなくともいへない。」

「併し、あんな噂は……火の手のない處に煙が上らない道理で、事によると、符関侯の方へやる事が能なくなつて……五百重子に異議のある爲め……かといつて、正面から断るといふことは惜しくもあり、子爵の身に取つて作憎いので、さういふ虚説を構へて娘を説得する隙を造つてるのではないかしら、僕は何だかそんな氣がするよ。」

「はい、少し逃げを張るね。」と若紳士は苦い笑顔を見せる。

「何しろ、もしも、君のいふ通り、車夫の常造と、令嬢が家出をして姿を隠したと

あれば、容易ならんことだが、あの令嬢にさういふ行ひを、敢てすることが能るか

奈うか、疑問だよ。」

こんな噂と虚説とが、翌日の新聞紙上だ。

爰は狩間侯爵の本邸、令息道雄の書齋である。

今しも、五六種の新紙に眼を通してゐたのが飽きたものか、一寸卓上に投出して、太く息を吐いた。

「あゝ、いよ／＼破滅だな。」と立上つて、室内を行きつ戻りつ初め、「五百頁子、もう、……望むまい。」

爰へ扉を開けて這入つて来た者がある。道雄は気がつかなくなつた。

「若様。」と這入つて来た女中は、入口で小腰を屈めて一聲かけた。

「うむ？」立留つて、其方を見る。

「あの、かういふ方が。」と、一葉の名刺を出す。

「留守だといはなかつたのか。」

「はあ。」

「困つたな、誰だ。」と取つて、少時眺めてゐたが、氣の抜けた時分に、「直ぐ此方へ。」

「はあ。」と出去る。

道雄は黙つて椅子に靠つてゐる。

すか／＼と、扉を慌しく開けて、一人の洋服を着た男。年格合は道雄と同じ位の三十三三で、髪を中央から分けたけが、道雄より本人げに見わる。

「やあ、久瀧。」と客は天窓を下げる。

「久しく見わなかつたね。」

「つひ、その、外交家といふ奴は、はゝゝ、申譯でも何でもないが、實際暇がないので。」

「併し愉快だらう、君のやうな健脚家又は……はゝゝ、餘り久しく見わなないから、實は案じてゐたのだよ。」

「奈うも恐縮だね、お付合せなんかされて。」

客はかういつて薦められた椅子に就く。

この客は、道雄の在米中の同窓で、今は某の新聞社の外交主任といふのを務めてゐる男である。快活で、才子で、談話の上手なものには、道雄の敬服してゐる處だ。

「何か面白い話はないかね。」と道雄が切出すと、客は少し得意さうに、

「あるよ。實はね、僕は京都へ行つてゐたのさ。昨夜歸京したのだが、君、外国人といふ奴は却々面白いよ。」

「あゝ、例ので京都案内を仰付かつたのだね。それはよかつた。」

「處が、仰付かつたのぢやないんだよ。此方から進んで仰付けられたのさ。」

「さうかい。」

「時に君の、結婚一件な、あれは一躰奈うしたんだい。」

見る／＼道雄の面色は變つた。

「奈うしたつて……。」

「何だか、僕は気が入りで、その話を耳にして、急に歸つて來たのだが。」

「いゝ種だらうね。」と道雄は冷やかに、客の顔を見成つた。

「いゝ種處か、僕は君、社の方の爲めにかう慌て、來たのぢやないせ。君——友人の爲めに、今日實はお悔みに來たのさ。」

「お悔みなんぞしなくてもいゝよ。大したことぢやないもの。」

「大したことぢやない？君はそれでは、五百重子の戀も覺めたんだね。甚く冷靜になつたね。それで、もう五百重子嬢を見限つたといふのか、そんなら、僕はさうぞ知つたら、社の爲めに、盛岡一件の事實を充分書かせるのだつたになあ、君の耻にでもなつてはと、躊躇して、内々君の意見を聴きに來たのだが、君がさう冷やかになつてゐて見ると、僕が隠し立てをする必要もないね。」

「君は、何か森岡家の秘密でも知つてゐるのかい。」

「君よりは多く知つてゐるさ。」

「こんなこと。」と道雄は乗出す。

「社の秘密だから、友人にも明されんさ。」

「何故？」

「君は五百重子を捨て、しまつたのだらう。」

「どういふ、理由ぢやないさ。」

(四) 夢の話

客は道雄の容子を少時見てゐた。女中が茶を運込む。

「森岡にどんな秘密があるのだい。」と道雄は熱心に手繰つてゐる。

「は、は、は、五百重子を矢張絶念められないのだ。」

道雄は苦笑で點頭く。

「今日の各新聞には何とあつたね。」

「五百重子の家出を事實としたものと、本人が不服の爲め、一時の斷りにかういふ噂を立てさせたものだといふのと、かう二派に分れて書いてゐるやうだね。」

「却々奈うも委しく見たね。侯爵は何といつてゐるね。」

「父か、何ともいつてゐないよ。」

「ふむ。それで、君は何方へ……何方の派を信用するね。」

「僕は、奈うしても、五百重子が出たのは事實だらうと思ふ。それも、あの女が奈うして、不義の爲めに、今度の結婚問題を厭つて、車夫と逃げたなどは、僕には受取れない。」

「うむ。僕の社では、その方の派で、探訪などは熱心にその事實を探つてゐるが、奈うしても車夫に幾分の疑ひはかゝつてゐるよ。僕の社の一人は、車夫の女房の談話を掲げたといつて得意である。」

「あ、今日の出でゐるね。併し、女房へ端書が來てゐるといふから。」

「さうだ、僕はね、處で少し妙な方面から、五百重子に就いて探つて見やうと思つてゐるのだ。」

「それで、盛岡の秘密といふのは。」

「うむ、それが、些と話し憎いのだよ。何しろ、もう少し君は黙つてゐた方がいいよ。」

「それは黙つてゐるがね。奈うしても五百重子の家出が事實とすると、この行衛へは果して何處だらう。」

「何處だか解る位ならこんな大噪ぎは出来はしないぢやないか。君にも似合んこと……。」

と客は高く笑ふ。

「處がね、これは君だから話すが、あの話の起る前にね、僕は五百重子と相談したことがあるんだ。」

「へい、そんな何時だい。」

客が眼を丸くするのを見て、道雄は少し躊躇したが、

「それは極、秘密なんだが、先月だ。僕の處へ五百重子がやつて来たのさ。」

「一人でか？」

「子爵が連れて来たのだが。」

「その前に、……つまり、洋行後だが、君は五百重子と交際してゐたかい。」

「いやしてゐなかつた。話したのが、先月僕の處へ来た時初めてさ。」

「君の戀もそれからかい？」

「いやその前。」

「ふむ。」と客は熱心である。

「初対面の女にしては、赤い顔一つしない、餘程無邪氣なものだつたね。」

「成程、それで、どんな話が始つた。」

「その時は別にどんな話もなかつたがね、僕は、餘程その時面喰つたのさ。で、今日でもその無邪氣なことを思出すと、奈うしても行方の知れなくなつたのが嘘らしくて。」と少し考へる。

「それはいいが、親しく交際したのかね、その後。」

「一度此方から行つて、琴の獨彈を拜聴して来た、それだけさ。」

「ふむ。」と力なくいつて、客は窓の外へ眼をやつた。

「昨夜、で、夢を見たのだ。」

「どんな夢を。」と再度道雄を見る。

「僕の處へやつて来てね、五百重子が、少々旅行をするからといふので、何方へですと聴くと、先方へ行つてからお知らせいたしませうと、それで眼が覺めた。」

「神経家だな。」と大きく笑つた。

(五) 怪しき來狀

「それはそれでいいが、相談とは何だね、こんなことを相談したのたい。」

「今度折があつたら、米國へ行きたいと思ふなんて話だからね、僕が是非連れて行かうといつたのさ。」

「すると、先月から内相談はあつたのかい。」

「何の？」

「結婚一條さ。」

「いよ／＼となつたのは昨今だが、むかしからの約束さ、何も、僕があれに懸想して、それから持上つたやうな譯ぢやないさ。」

女中は黙つて、控へてゐたが、この時道雄に近づいて、『お手紙が。』と出す。

「うむ。」と受取つて、一寸封皮を見ると「や?!」と可怪しな聲を出した。

女中は出て行かうとしたが、振返つて、一寸立留る。

「何ぞ御用で。」

道雄は氣が注いだやうに其方に向いて、「何でもない。」

女中は出さる。客は道雄に注目してゐる。

道雄は其様を、披けもせず、その儘卓子の抽出へ入れてしまつた。而して氣遣はしさうに、客の顔を一寸見て俯向く。

「五百重子嬢の家出に就いて、僕はかういふ断定を下したよ。」

「奈ういふ。」と道雄は氣のない調子でいふ。

「それはね、五百重子の君に心のないのは事實だ、とかうまあ考へて見ると、それなら何故、あんな約束をしたかといふかも知れないが、其處は世間見ずの令嬢だ、一口にいやすとは、君の方へも子爵にも、自分からいふことが能なかつたのだらう、其處で、これは尋常一様のことでは断はれないから、逃げるに若かすと、行方

を暗ましたのだらうと思ふね、別に、これぞといふ深い巧みや、意中の人があつてぢやないらしいよ。」

「さうかしら、さうすると奈うしたらいいだらうね。」

「先づ、君が五百重子を捜出して、充分真心を盡すのだね、さうすれば、先方でも恩に感じて、初めて其處に戀といふものが生じるだらう。さうでもしなければ、まだ箱入りの初な姫様だから、戀なんてものは知らないのだらうと考へられるのだ。」
「ふむ。」と無意味に唸つて、「さうかしらん。さういふ女が家出したら、奈ういふ處へ行くものだらう。」

「友達の許へでも行つて隠れてゐるだらう。」

「友達………」と考込む。

「奈うね。」

「併し、奈ういふ方面から捜りを入れたらいいだらうね。」

「奈ういふ方面もかういふ方面もあるものかね。君の勝手な方からやる。」
「勝手な方つて？」

「まあ解らなければいゝ、僕が搜つて上げやう。奈うせ君にさせて置いては、確な
ことはしないから。」

「だつて君のいふことが解らないもの。」

「いゝよ、今に解らせるさ。兎に角今日は、これで失敬しやう、他日成功してから
改めてお悦びに出やう。」と立上る。

「まあ、いゝぢやないか。」

「いや、少し急ぐことがあるから、では、左様なら」と屏の處へ行く。

「さうかい、まあ、もう少しいゝだらう。」といひながら、送つて出やうとする。

客が屏へ手をかけると、外から開いて、先刻の女中。

「あの若様、盛岡様のお使いで、何卒直ぐお出を願ひたいと申して参りましたが。」

「あゝさうか、今上るといつて呉れ。」

「それでは失敬するよ。」と客は逃るやうに出て行つた。

道雄は送りもせず、直ぐ卓子の抽出に手をかけて、先刻の手紙を出し、少時見て
わた。

(六) 天祐々々

上野停車場の一二等待合室、今這入つて来た紳士は、四邊をさようついてゐる。

「津村君、爰だよ。」とストロップの前から、高く一聲出ると、其方に向いた。

「甚く待たせたね。」

「や、失敬した〜。」と津村君なる紳士は其方へ近付く。

「何してゐたんだ。」と相手は不平さうに、津村君の顔を眺めた。

「いや、大成功〜、吉川君、僕の眼識は大したものだらう。」

「矢張申譯をいふ了簡かね、質が悪いよ。日光くんだりまで引張出すなどは、僕も餘程買ひかぶつてゐるのだから。」と笑ふ。

「處が、君、質をいふと、僕はまだ日光行は疑つてゐたのだが、いよ／＼定まつた直ぐ乗らう。」

「乗らうはいゝが、まだ五時二十分までには四五十分間があるよ。」

「さうか、」と時計を見て、「なるほど。」

「なんだ、慌てつこなしだせ。」

「いや、質はね、僕は……それ、今日君に分れたらう、あれからね、盛岡の女中に少々握らせて、道雄と子爵の内談を伺はせたのだよ。して、正しく、僕のいつか通り、優しい道雄様の手紙は五百重子ので、日光といふ字をちらと見たのが、偶然にも、僥倖にも、五百重子の在家なのだ、何と凄からう。」

「君は、對談で友人として道雄先生に會へるから都合がいゝのだよ。僕など二度行

つたけれど會つて呉れなかつた。」と吉川君は愚痴をいふ。

「何しろ先方へ行つたからの手筈は汽車中で定めるとして、もし少し委しく聴いて置きたかつたことがあるのだ。」

「何だい。」

「あの、子爵の處へ来た五百重子の手紙にも道雄の處へ来た手紙にも、同じやうなことが書いてあるといふのだが、何といふ意味であつたかそれが解らんのぞ。」

「ふむ。其奴は惜しいね。」

「まあ、いゝや。」

こんなことを話してゐるうちに、電燈に火が這入つて、發車に急ぐ客は、各荷物を肩にしてプラットホームの方へ行く。

もう乗込ませる容子だ。

「おや、もう出るのかしら。」と吉川君が時計を出す時、津村君は慌しう覗いて、

「この汽車だ、切符を買はう。」と背後にゐた婦人客を突退けて行かうとする。
「もう僕が買つて置いたよ。」

「さうか、それでは乗らう。」

と二人はプラットホームの方へ出かける。突退けられた婦人は、二人に續いて、この背後を絶えず離れない容子である。

二人は一寸背後を向くと、この婦人がゐるので顔見合せて、何事か密語した。

婦人は二十二三の、少し垢脱けのした丸鬚であるが、四邊の不景氣な中に、一寸

異彩の逸物なので、二人は換る／＼、幾度か改札口へ行くまでに振返つた。

恐ろしさも思はぬのか、平氣で後を尾けてゐる。

それでもプラットホームへ出た時には見失つたので、二人は四邊を見返りなが

ら、

「奈うだ、ならうなら奴の箱へ乗らうぢやないか。」と吉川君が色氣を出す。

「さうだね、何處へ行つたらう」と、これも賛成して、きようついでゐる。

二人は物好にも、箱を一つ／＼覗いて「爰にもゐない。」と少し落膽して、思切つ

たものか「大事の前の小事に、こんな力を入れて溜るものか、これへ乗らう。」と吉

川君が促せば、津村君も思止つて、

「さうだ。は、君と来ると直ぐこれだから困る。」と笑ひながら、二等室へ這入

る。

と續いて例の婦人も這入つて来た。

「天祐く！」と手を打つたのは津村君だ。

(七) 君大變々々

室内は二人と、この婦人一人と、都合三人より外に乗人はなかつた。天祐かも知

鈴の鳴るのや、がたん／＼の扉を閉める音が、遅緩しくならないので、二人は度度も窓から顔を出してゐたが、そのうちに汽笛が鳴つて、車は動き出した。

「今夜は日光で活動も出来ないから、宇都宮へ宿るんだね。」

「君は日光にお馴染の宿屋はあるかい。」と吉川君は聞いた。

「あることはあるが、なるべく無駄をしないやうに、例のが宿つてゐるさうな、大きな處へ宿つて、手付かすに搜れる方法を執らうぢやないか。」

「さうだね。」と吉川君は一寸婦人客を見る。

「さうして、非常な骨でも折つたやうに、大きなことをいつて。」

「は、は、奈うも君は質が悪くて困るよ。」

時々二人は話の間に婦人を窺み見るのだが、少しかう上を向いて、何か考へてゐるらしく、二人の方へは眼も呉れない。

「君それから、宿帳には、新聞記者などと記けちや困るせ。」と津村君がいひ出すと、

「當然さ。官吏位にして置くさ。」

「さうく、それなくては失敗するよ。もしも先方から、かくと喚出して、もした日には、逃げられたらもうお仕舞だよ。」

「さうだ。」

こんなことを話してゐるうちに、赤羽驛へ着いた。爰では二人の客が這入つて來たので、前の二人は詰らなさうな顔をして、その儘居眠りの風か何かで、こそ／＼例の婦人に注目してゐた。が、程なく、終日の奔走に疲れたものか、ぐつすりを行つてしまつた。

赤羽を發てからは月が昇つて、蒼い光は窓の中を照し初める。

。。。。。。

宇都宮の唯ある旅店へ着いて、初めて思出した二人は、汽笛の音も車の響も忘れ

「寝てゐたのを、呼ばれて夢中で爰まで来たのである。」

「君、あれは奈うした。」

「あれとは。」と吉川吉か考へる。

「例の女さ。」

「うむ、上野から来た丸鬘か。」

「さうさ、何處で下りたか知らんかい。」

「知らないね。何しろ赤羽を出て……ねと、月が出て来たなと思つた時分から後は覺わがない。」

「新聞を見てゐたのは知つてるかい。」

「うむ、見てゐた。」

「何處で下りたらうな。」と心配顔でいふ。

「宇都宮……爰だね、さうすると、同じ所で下りれば解る筈だが……君は甚く氣に

かけるね、あれはもう定まつてる人物ぢやないか。もう止せ。」

「いや、處が君。」

「僕に心あり氣に後を尾けてゐたに惚言るのだらう。」

「處が、君、あれは何物と鑑定したね。」

「あれかい。丸鬘さ。」

「そんなことは解つてるさ。何者だと思ふかといふのだ。」

「といふ處へ女中がやつて来て、『御飯はもうお済みでございますか。』

「あ、済んだよ。」と津村君がいふ。

「ではお風呂へ直ぐ。」といつて去る。

「おい君、風呂は奈うだ。」

「君行つて來給へ。僕は一寸手紙を書くから……。」と抱へ靴を引寄せて、吉川君は中を掻廻し出す。

「手紙なんか早いぜ。まゝ差に角行つて来るから、妻君の處へ安心させに書いてやれよ。」と手拭を握つて出て行く。

吉川君は、手紙を書いてしまふと、出すでもなく、また靴の中へ入れた。愛へ歸つて来た津村君は、頓狂な聲で、「君、大變〜?!」

(八) 徹夜の覺悟

折柄十時の時計が階下の方で鳴つた。

「何が大變だ。」

「何がかにかつて。」

「湯が熱かつたのかい。」

「それ處ではないんだ。ゐたんたく。」

「誰がさ。」

「例の奴さ。」

「あの丸鬚が。」

「さうだ。僕が風呂場へ行くと、出合頭に出て来たのが、例のさ。驚いたね、こんな處まで僕の後を尾けて来やうとは、實に意外だ。」

「何も我々の後を尾けて来たのぢやあるまいに、餘計な心配をしたものだね。」

「餘計な心配ぢやないよ。君は一躰、あの女を何者だと思ふ。」

「だからいふぢやないか、丸鬚——人の妻君さ。」と吉川君は笑ふ。

「奈うも妻君持は不可ない。上野で「ならうなら、同じ箱へ乗ろうぢやないか」

いつたのは誰だい。さう早く斷念をつけて溜るものか。」

「さう喰つてかゝらないでもないことだよ。」

「何も喰つてかゝる譯ぢやないが、餘り君が冷淡過るから。」

「冷淡でもなんでもないぢやないか。」

「冷淡さ。一辨君は、同業者といふ位置で、兎角競走心といふものを起すから困るよ。僕は友人として、君に今度の日光一件をさへ明して、かうして君の利益を計つてるのだらう。その邊を察したら、何も君が帝國新聞の記者で、僕が内外新聞の記者など、分隔てはない筈だ。僕が苦樂を共にしやうといふので君も秘密を明した以上、君も僕の爲に心配して呉れたつて、罰の當る道理はあるまいぢやないか。」

「は、は、君は奈うかしてゐるよ。誰でも何人かに想をかけるさういふことをいつて困るが、君、あれは丸儲だせ、よし給へ〜。」

「おや、君は何をいふ、僕が何時彼女に奈うのかうのといつたい。だから君は冷淡だ。」

「だつて何だかそんな風だせ。」

「處が違ふんだ。奴は僕は、何者かの廻し物ぢやないかと、それで心配するのだせ。」

「廻し者？」と吉川君は呆れた顔をする。

「さうさ。」と津村君は得意の顔色。

「奈うして。」

「君も随分迂遠な男だな。」

「だつて君。」

「だつてもないものだ。君にはさう見えないか。あのいやに済した態度といひ、此方の容子を窺ふ處といひ、あゝ圖々しさが唯の妻君に能る藝かい。」

「さうかね。」

爰へ女中がやつて来て、

「お風呂が済みましたらお床を執りませうか、奈何でございます。」

「あゝ、まだ済まないのだ。」と、吉川君が手拭を出す。津村君は、巻簾入を引寄せながら、一吹着けて、火鉢に向ひ、

「嫂さん、床を執つて貰はう。」

「はい。」

「ぢや行つて来るよ。」

「よし。」と津村君は済してゐる。

吉川君が出て行く。津村君は女中に向つて、少し塵揚な調子で、

「明日日光へ一番は何時だな。」

「わゝ、四時二十分です。」

「四時？四時は甚いな、まだ暗いだらう。」

「へゝ。」

「次は？」

「六時四十五分それから八時五十五分。」

「さうか、六時でも早いが、八時五十五分といふと九時だ。九時ぢや遅い、二番

にしよう。二番がいゝ、二番に間に合せて呉れないか。いゝだらう。」

「儘承りました。四時二十分ですとお連れさんがございますが。」

「四時二十分に、お連れさんだ？いや、迎も今から寝たんぢや間に合はない、天

下一等の美人のお供でもこればかりは閉口だ。」

「ほゝ、それぢや駄目でございますね。太甚お強うございます。」

「四時ぢや願下げだ。一躰さんなんだい。」

「あの、貴下が先刻お風呂へお出の時に會ひなすつたでせう。あゝ奥様風のお方

でございます。」

「へゝゝ？あれかい、あの。」

「御一緒に東京からお出なんださうですね。」

「此奴、何處から聞いた。」

「あの方がさう仰有つてました。」

「何だつて。」

「あの二階のお二人の洋服のお方は新聞記者だからつて。」

「は、それで何さかいつたか。」

「明朝一番で日光へお出だから、妾も一番で行くと仰有つてゝした。」

「驚いたなあ、ちやあ此方も一番だ、今夜寝ずにもても一番に乗る。」

「おほ、大層御執心ですこと。」

「一鉢あれは何者だい、宿帳には何とある。」

(九) 眠むい〜

女中は少時笑つてゐたが、その中に床が敷けると、

「では一寸持つて参りませうか。」

「うむ、さうして呉れ、奈うも益々不思議でならないから。」

かういふ處へ吉川君が歸つて来て、

「あゝいゝ氣持になつた。」と火鉢へ手を出した。

女中に去る。吉川君が津村君の顔を覗く。

「うむ、君、明朝一番で日光へ行くことにしたよ。」と津村君がいふ。

「大變氣が早いね、何時だい。」

「四時二十分、僕はもう寝ない意だ。」

「大變に慌てたもんだね。」

「實はかうなんだ、例のがな……。」と女中から聞いた話を見て来たやうに舌焼つて、

「だから、今宿帳を取りにやつた。」

「成程、可怪しいな、其奴は併し面白い。僕も徹夜は賛成だ。」と吉川君も顔色を動かす。

「奈うだ、参つたらう、僕の眼識は大したものだらう、奈うしても睡ぢやないよ。」

今の女中が宿帳を持って来る。

「まだ我々は記けなかつたね。」と吉川君が顔を出す。

「うむ、これだな。」と最後の處に、餘り美事でもない女文字で記してある、木下直子といふのに、津村君は眼を注いでみたが、手帳を出して「わゝと、東京市、麻布區六本木二の四、山本方、木下直子二十八才。」と記け終つて「よし、有難う。」と笑出す。

「御面倒様でも、何卒お一つ。」

「よし、僕が記けてやらう。」と吉川君が筆を執つて、「君のも記けるよ、同じ住所でいな。」と筆を走らせる。

「嫂さん、二人はね、今夜もう寝ないから、お茶を一つ注して、何か菓子を一持つて来て置いて呉れないか、それから、煙草を三つばかり、それでもう此方はいからね。」

「はい。」と出て行く。

「君、いよく決行か。」と吉川君は懸念さうな容子で問ふ。

「當然さ。徹夜でなくては、これから寝たら一番には間に合はない。幸汽車中で寝込むで徳したよ。」

「うむ、さうだ。」と時計を見て、「まだ十一時か、十二、一、二、三、四、五時間あるせ、起てられるか。」

「平氣さ。」

それから、色々の浮世話に、運ばれた菓子や茶で、二時頃までは眼も堅かつたが次第に話も少なくなつて、二人とも、一言、二言と漸次に、果は敷いてある布団の上に横になつた。寒い風が身に沁みるので、夢中になつて、上のを引張り、三時半頃に、階下で出發の仕度を始め出した時分には、高い聲の聲ばかりである。

女中が若しやと上つて来ると、起てゐる筈の二人がかういふ有様なので、呆れ返

つた。

「もし、お客様、もし〜、もう時間でございますよ。もし、」と聲ばかりらたいて、津村君の天窓は動かされた。

「む〜」と寝返りをする。

「もし〜」

「吉川を起せ。」

「もし、貴下、もし時間でございますよ。と今度は吉川君の方へ来る。

「む〜、」といつたなり動きもせぬ。

女中も困つて、「もし〜、」を續けてゐるが、二人とも寝入ばなで、この夢は破れないのだ。

「もし、もう時間でございますよ、一番が出来ますよ。遅れますから早く。」

「む〜、」と津村君は返答をしたが、尙起さやうとはしない。

「もう一番が出来ますよ。」

「二番……、」と寝言のやうにいふ。

「二番でございますよ。」女中はいよ〜急ぐ。

「二番だすも〜、眠むい〜。」

(十) 同じ目的

一番に眠むいので遅れた二人は、二番に辛うじて乗込むで、明け放れたばかりの空の色に深呼吸をしながら、車窓から山の光影を見てゐる。

「奈うしたらう。」と吉川君がいひ出せば、

「さうさな、一番で行つたのだらうよ。」

「併し、先方では我々と一緒に行きたいやうな考慮でゐたのだから、……ことによると一番に起さんと聽いて、それならこの按配では三番の九時でなければ間に合ふまい。」

「といふもので、再度寝込むたのかも知れないせ。」
「三番——これへは乗つた容子はなかつたかね。」と吉川君は、見ぬもせぬのに振返つて見やうとする。

「いや乗りやしない。」と津村君が受合ふ。

「さうかな、君は宿で聴かなかつたか。」

「うむ、聴かうと思つたが、あんな大きなことをいつて、一番に間に合はないんだらう、何だか機が悪くて、送つて出られるのも心持がよくなかつたせ。」

「は、甚く弱くなつたな。」

「だから、楷下の方はなんて、口から出やしない。何しろ、奴も日光へ行くことだけは突留めたが、果して何の用で行くのか、それを余うしても合點が行かないよ。」

「さうだね。何者だらう。」と吉川君の方から今度はいひ出す。

「さあ、それは解らないが、何しろ、上野でした二人の話も立聴してゐたのだね。」

「さうだ、あの前から、ことに由ると尾けてゐたのかもしれないね。」

「いよく油断がならないね。あんなのが危険なんだよ。」と津村君も氣味悪さうに四邊を向はし出す。

「今日までの苦心したことも、奴に氣取られてゐないだらうか、僕は何だか、かう何から何まで見透されてるやうな氣がして、は、臆病になるよ、あんな女に尾けられては。」

かういふ話のうちに、鶴田も鹿沼も過ぎ去つて、文狹に着いた。二人は窓から首を出して、この邊で奴にでも乗込まれては、絶命だと、上野の天祐も今は口に出されぬ。

文狹を出てから、今市までは二人とも無言で、唯考込むでゐた。今市を越して日光に着くまでには盛岡子爵家の話であつた。日光で汽車を下りて、初めて、これから執る仕事の相談なども、太甚遅れた種類だが、決局大小を問はず、旅店を悉く

訪問して捜らうといふことになる。

「併し、日光にのなかつたら奈うしやう。」と吉川君は少し思案しだした。

「大丈夫だよ。まさか、足尾の方へ山道を通げるやうな、そんな大それた足は有つてゐないよ。令嬢といふものは、大抵一人で出て、行處に困つて、手紙か何かで迎ひを呼ぶ位の智慧より出ないものだ。」

「さうだらうな、奈何に、才智があつても、學問があつても、女といふものは弱いものだからね。」

「さうだ。何しろ、爰の家から聞かう。」

といふもので、停車場前の一旅店へ這入つた。すると、其處から一人の婦人が出て、二人を一寸見たなり、彼方へ行つてしまつた。

噂に上つた、上野から尾けられた丸鬚に違ないとは、二人とも認めた處である。

「おや、奴もう來てゐるのかしら。」

「愕いたな、一番で來たものと見るね。」

「何しろ、まあ、目的を聞かうよ。」

「入つしやい。」といふ女の聲に、二人は門口に後込したが、吉川君の方は勇を鼓して。

「私がかういふものだが、」と名刺を出して。

「その此店に、盛岡五百重子といふ婦人は宿つてゐますかね。」

「はあ？」と小女は帳場を振り返る。

「二十一位の令嬢風の美人だ。」と津村君が追加した。

帳場から、女將さんらしい四十位のが出て來て、「唯今もさうお尋ねの方がございましたが、手前共へは、さういふお方はお出にならないので……へ々。」

この答へに二人は顔を見合せた。

(十一) 追駈ける

爰はこんなことで、飛出して、一町ばかり日光の町を行つて、また一つの旅店がある。其處へ這入つて例の通り聞くと、爰でも前と同じやうに、今も聞きに来たが手前共にはお泊りがないと来る。

二人はます／＼、先列の丸鬚に疑ひをかけて、奈うしてもこれから搜らうかなど横路へ外れたが、四角の處で、偶然、その丸鬚に出會した。先方は知らないのか、見て見ぬ風か、何しろ急歩で行くので、終に見え隠れに尾けやうといふことに決する。

丸鬚は背後も見ずに、さん／＼と唯ある大きな旅店へ這入つた。

「あの、妙なことを窺ひますが、もしや當店に、かういふ方は泊つて在つしやらないでせうか」と、温しい聲で聞いてゐる。

何でも名刺だか寫真だかを出して見せてゐる容子だ。二人は袖引合つて見てゐる。「はい、少々お待ち下さい。」と女中らしいのが奥へ行く。少時経つて、また出て来て。「あの、昨日までお出になりましたが、何でも今朝、中禪寺の方へおいでになりました。」

「はあ、さうですか、もう此方へはお出にならないでせうか。」

「わゝ、何でも、中禪寺の別荘とかから、昨日お迎へが参りました。」

「あゝさうですか。ちやあ、一寸考へて、」

「奈うも有難う存じました。」と會釋をして立去る。

「君、中禪寺だといつたぢやないか、」と津村君は丸鬚の行く方を見た。

「うむ、併し、誰のことを聞いたのだから解らないせ。」

「無論五百重子のことさ。」

「さうかな、一寸此店で聞かうよ。」

「何といつて。」と津村君は、尙丸鬘の後方姿を見成つてゐる。
「今来た女は何を聞いたかど。」

「さうさね、聴いて見やう。」

「ぢやあ、」と吉川君が先に、店へ這入つて一寸帽を去り、「あの、妙なことを窺ふやうですが、今此店へ何か聴きに來た女がおりますな。」

「はい。」と女中が答へる。

「何を聞いたのですか、」と津村君がすかさず口を出す。

「手前のお客様を尋ねてお出になつたんでございますが、」と不審しうに二人を見てゐる。

「お客といふと。」

「盛岡五百重子といふのぢやないか、」と吉川君がいふ。

「いゝわ、そんな方ぢやございません。」

「音生?。」と津村君が口の中でいふ。

「ぢや、中禪寺の別荘へ行つたといふのは誰だね。」

「足立さんとお仰有るお方で。」

「令嬢風の人かい。」

「いゝわ、」と少し笑ひを含んで、「男の方でございます。」

「男だ?。」と二人は同時に呆れた。

それで爰を飛出したが、二人はいよく解らなくなつた。

「いよく、狐に憑まれたな。」

「何しろ、今の丸鬘が怪しいよ。」と津村君は四邊をさよらつと出した。

「後を尾けやうぢやないか。」

「まだ遠くへは行くまい。」

二人で急いで見たが、何方へ行つたか更に解らない。

「何でも中禪寺だらう。」

「さうに違いない、車を命じやう。」

「さうだ。」と四方へ目を配つて、今度は車を探るのである。

折しも二輪の車は、ぶら／＼やつて来た。

「おい車や、中禪寺まで直ぐやれ。」

「へい、」と此方の風躰を見る。

「急いでやつて呉れ。」と津村君が怒鳴る。

(十二) お嬢さま!!

芝の公園はもう梅が盛りを過ぎて、四邊の閑かさに、杖を曳くものも多くなつた。

鳥山の西向観音の掛茶屋に、二人の學生風の女が、箱髪にその額を隠して何や

らひそ／＼と話してゐる。一人は二十前後か、薄化粧の細い面を俯向け勝にして、老婆の汲むで出す茶を啜りながら、相手を上目遣ひる見る。相手の方は少し若く、紫紺の袴を胸高に穿いた、快活さうな十九か二十位の。二人の話は極めて低い。

「そんならあの方は、買収されたやうなものね。」と年長のがいふ。

「へい、まあさうなんでせう。ですけれど、御本人は大變あゝいふことが好きなんでせう。だから何とも思はずに、丸鬚か何かに結つて貰女、奈う見ても奥さんなのですわ。自分の姉でゐながら、妾まで途中で會つたら見違へる位よ。貴女と同年にや見えないわ。」

「さう。併し、日光へお出になつたことは確かなの。」

「へい、確かだつていつてるのよ。」

「随分大膽な方ね、松本さんは。」

「だつて、あの位なことなら妾にでも能てよ。姉なんぞさういつてるわ、この位な

「ことが出来ないやうぢや、逆も一家の主婦になれやしないなんて。」

「まあ、大氣焔ね、ほ、ほ。」

「だげご、五百重子さんも餘程大膽だわね。」

「あの方は、あゝいふ方ぢやないんだげご、奈うしてあんことをなすつたんでせう
妾、奈うしても解らないの、だつて、むかしからの許嫁で、狩間さんへ行つしやる
ことは、御本人からも妾にお話しなすつたことがあるんですもの、今更それが不服
で姿を隠すなんて道理はないわ。」

「ぢや、先から定まつた話なのね。」と、袴の方は以外らしくいふ。

「わゝ、すつと前からだわ。」

「そんなら姉と同じやうね。」

「あら、松本さん——お姉さんにそんなお話がおありなんですの。」

「わゝ、黙つて在つしやい。妾に聴いたなんて仰有つちやいけなくてよ。まだ先方

の方は御存じないんですから。」

「何方？」

「今内外新報の外交主任をなさつてる、津村徳朗さんて方なのよ。姉さんは知つて
らつしやるけれど、先方の方はまだ御存じないんですつて、黙つて、頂戴。」

「あゝ、さう。あの方？」

「貴女御存じ？」

「狩間さんの道雄さんと一緒に米國のスタンダード大學を卒業なすつた方なんでせ
う。」

「わゝ、さうなの。」

「妾一寸聴いたことがあるけど……さう、松本さんの……まあ、いゝ一対だわ。」

「あの、五百重子さんと窓で在しつたのは、貴女と、姉と……それだけね、御身
で……今以て。」

「わい。」

「そのうちで、貴女は……貴女だけね、まだ御相談のない方は、」

「妾なんぞありやしないわ。」と、年長のは少し耳の根を染める。

「何しろ妾、大變遊んでしまつて、もう失禮しませう。」

「あ、さうい、お姉さんに——お歸りになつたら宜しく仰有つて頂戴！ 貴女も亦些とお遊びに入つしやいな。」

「わい、有難う。左様なら。」

「左様なら！」と雙方立つて會釋する。

袴の方は黒本尊の方へ、靴音活潑に下りて行つた。

一人で残つた方は、四邊の何百年と経つた、老杉を見比べてゐる。

と此方へ登つて来るやうな蹩音がして、一人の女が妾を表はす。

「お嬢さま。」

(十三) 好きな方？

「お嬢さま。」とまた續けて、やつと近附いたのは、侍女らしいのである。

「何有。」とやうやく其方へ眼を向ける。

「あのお客様でございます。」と、その傍へ寄つて、「まあお探し申しまして……一寸お庭にお在遊ばすと思つてをりますうちに、まあこんな處へ来て在つしやるんでございませぬもの……妾……また盛岡様のやうなことでございましては……御前様からも毎々御注意遊ばしてお出たものでございませぬから、もしやと思つて……あの、お客様で。」

「何だね、もしもなんて、妾そんなことはありやしないわ。」

「でございませぬけれど、こんな處までお出遊ばすやうぢや、何とも申せませぬ、ほい。」

「可厭だね」と笑顔を少し見せて、「今ね妾、餘り氣がくさくしたから、一寸散歩に出て来たの。この下で松本さんのお妹さんにお目にかゝつたから、少し聴きたいこともあつたので、爰へ来たの。」と一寸背後の老婆を顧みて、「ねねおばさん、今まで他の方と話してゐたんだわね。」

「わゝ、今しがたまで……たつた今でございませうよ。黒本尊様の方へ下りてお行になりまして、ほゝゝ、却々御詮議が……。」と老婆も口を添へる。

「何しろ、お嬢さま、お客様がお待ちでございませうから、何卒直ぐ……。」と引立てやうとする。

「あゝ、行くよ。」と立つて、「お客様つて何方？」

「あの、いゝ方でございませう。」

「いやな豊や。」

「あの、かう色の白。」

「そんなこといつたつて知らないわ。」

爰へ二三人の小供が、「さあ進め、もし此方は烏山占領だぞ、萬歳！」と、威勢よくやつて来て、下の方を瞰下しながら、「や、向つて来たぞー」と大將株が呼吸急いでゐる。今大合戦と見ゆる。麓に鬨の聲が起る。

「さあ、直ぐ歸りませう。」と侍女が促す。

「ごんな方さ。」

「かう色の白い、鼻の高い、立派な方でございませうよ。」

「そんなこといつたつて、妾……。」

「あの、何とか申しましたつけ。」

「何人なの？」

「何でもあの、よく役者にあるやうな顔立の、この前一度お出になつた。」

「誰方らう？」と、考へる。

「何でもハイカラな方でございます。」

「そんな方知らないわ。」

「かう、金の書つて字の『』と咽の處へ兩手をやつて、『留針をおつけ遊ばして。』

「妾のお友達にそんな方ないわ。と少し拗ねて見せる。」

「い、わ、お友達ぢやございませんので。」

「ぢやあ……妾に……。」

「は、お嬢さまにお目にかかりたいと仰有つて、あの二階の應接間にお待たせ申してございますから。」と益々急です。

「お名前を伺はなかつたのかい。」

「え、つい、……先達もお出になつた方なんでございますよ。」

「女の方？」

「い、は、男の方でございますよ。妾が貴女に、お嬢さまに恰度……と申し上げて

お嬢さまに叱られたことでございます。」「あ、あの方。」と思出したらしくいつて、急に振り返り、「あの、をばさん、お茶代を爰に……。」

「はい、有難う存じます。」

「さあ行かう、」とお嬢様は、侍女より先に下りて行く。

「御自分のお好きな方を聴くと、あれですもの。」と侍女は、一寸茶店の老婆を見る。

「やつぱりお若いうちは、ほ、ほ、有難うございます、お静かに……。」と見送つた。

(十四) たんく怖

庭に面した掃出しの欄に、腰をかけて、庭面の泉水を眺めてゐるのは、今爰に待つ人のある客、洋服の新形なるを着てゐるので、一寸見紛ふが、狩間侯爵の令息道雄その人である。退屈さうに幾度か仰をしてゐる。

折しも彼方に襖を開けて這入つて来た者がある。これが待つ人か、例の烏山に
たお嬢さまと呼ばれたの。

道雄は愕いて、火鉢の側、設けの座布団の上へ窮屈に四角に構へた。

「まあ、大層お待ちせ申しましたさうで……奈うも失禮いたしましたわね。」と兩手
を突いて、奈うも其後は……。」

「いや僕こそ……。」と、親しい間か、無造作に挨拶か濟む。

「あの、百合子さん。」と客の道雄は改まつて、「急に變なことを窺ふやうですが、今
日はお母堂はお留守ですか。」

「はい。」

「さうですか。」と安心したらしく胸を撫下して、それで、貴女はまだ黒井さんのこ
とを御存じないでせうな。」

「黒井さん？」

「はい。」

「黒井さんて、妾、存じませんわ。」と百合子は解せぬ面打でゐる。

「御存じなければ尙更幸。」

「黒井さんて、何ですの？」

「いや、近日御尊父さんからお話がある筈ですが、兎に角、先へ私からお話申して
置いてもよいのです。」

「どんなお話なんです？」

「いや、貴女に……實はお目出度い話なんですが。」

「まあ……。」と少し羨合むて、頬を染めた。道雄を少しく乗出して、百合子に風情
を見てゐたが、やゝあつて、これも若々しく辱かしさうに、重たい口を開いた。

「實まね、百合子さん。」と容子を見てゐると、百合子は何う思つたか、急に態を改
めて、「はい。」と答へる。

「私が盛岡との話が定つて、一緒になつたら、是非とも、この、貴女をお世話申して、まあ媒介人に立たうと、内々御尊父さんにお話申して置いたことがあるのです。」と四邊に氣を兼ねて、低聲になり、「それでその先方と申すのは、永らく米國の大使館附の武官をしてゐる男ですがね、至極温良な、未來充分昇進の見込みのある人物で……それに百合子さんをといふ下心であつたのです。處が御承知の通り盛岡の五百重子さんはあゝいふことになり、私の方は仲々——これから先何時纏ることやら、いや逆も縁がなからうと思ふのですが、さう／＼待つてゐても、……といふ矢先へ、昨日その男は米國から歸朝しまして、でこの期を失ふと當分……何ですか、私の方は兎に角、貴女の方は纏めたいと存じましてね。何れ御尊父さんからお話しあるでせうが、もしもの時に、御異存でもあつては、仲に立つ私が困りますから、それで、實は窃乎貴女のお心を窺ひに上つたのですが。」

「はあ、」といつたきり、百合子は黙つてしまふ。

「それで、私の方に、これが纏ると少々注文があるのです。」

「まあ、何だか怖いんですのね。」

「別に怖くはないのです。」

「だつて、注文なんて。」

「それはね、少々……手前勝手なやうですが、大した……まあ貴女に能ないといふ程のことぢやないのです。」

「何ですか、仰有つて御覽なさいな。」

「些と申し憎いのですが。」

「だつて注文なら、いはないぢやられないぢやありませんか。」

「それはさうですが、實は……。」とポケットへ手を入れて、何やら紙包を出した。

(十五) 手がかりの書面

「これです。」と百合子の前へ突出したのは一葉の寢真だ。

「まあ、五百重子さんのお寢真ぢやありませんか。」と手に執つて眺める。

「まだあるのです。」とまたポケットを捜る。

「まだ？いよ／＼險呑ね。」

「これです。」と出したのは、一封の書状。

「それは何ですか？」

「五百重子さんの手紙です。」と見せながら。

「え、これに就いて少々御相談があるのですがね、奈何でせう、お承知下さいませ。

すか。」と覗くやうに百合子を見る。

「妾に能ることならいゝんですわ。」

「五百重子さんの在家を捜して、私が可厭なら可厭でいゝから兎に角、子爵家へで

も貴女へでも、貴女……お友達の貴女から、彼女の心地や何かを聞いて、話すなり

何なりして連れて来て頂きたいのですが、奈何でせう。お友達と申して、貴女でなければ、外に適當な方がないのですからなあ。」と焚付ける。

「まあ、さうすると、妾も買収されるんですわね。」と笑ひだした。

「は？」と道雄は聞き直す。

「さうでせう。松本さんと同じやうに。」

「や、これは驚いた、松本さん、奈何してそれを御存じです。」と少し呆れる。

「丁と知つてますわ。」

「これは怪しからん、奈何してそれを……や、油断のならん。」

「松本さんは日光へお行になつたさうですけど、まだ五百重子さんは見付からな

いんですか。」と百合子は一本参らせた意。

「それで、す……あ、もうさう知れてをりますなら白状しますがね、實の處、松

本の直子さんにも少々條件を付けてお願ひをしたのですがな。先生却々、かういふ

「これはお好いでして、妾は五百重子さんのお顔は忘れやしないから、それより一緒に見なくなつた車夫の方を探ね出して、而して五百重子さんを引出すと申されまして、私の處へ来た、この日光からの手紙を頼りに、昨夜日光へお行になつたのです。」

「まだそれで知れないんですか。」

「何とも音沙汰なしなのです。」

「さう、それなら、妾も一つ探偵になつて見ませうか。」

「何、何卒一つ。」

「まあ買収されませうね。」

「は、は。」

「何しろ、それぢや……この五百重子さんからのお手紙を、拜見してもらいでせう。」

「は、関ひません。」

「さう、」と百合子は封皮を抜いて、中を讀出した。

この手紙は小判の罫紙に、ペンで少く五六行記してあるばかりだ。

一寸、妙な事情が起りました、急に母から小々の金子を借り、こんな處へ参りました、別に狂氣した理由でも何でもありませんから、御安心下されませ。一昨日のお約束は永く忘れませんが、ことによるごどうなるか解りません。もし妾よりよい……と申せば、世間に澤山よい方はおいでせうから、何卒お氣に入つた方がございましたなれば、妾に關はず、お定めを願ひます。蔭ながら、貴下様の御幸福をいのり上げます。呉々も妾のことは御心配なすやう、御縁があればその節は……まあ、今の中は少々隠れてゐたうございませから、お捜し遊ばされずに。

かしこ

三月五日

五百重子

道雄様

これが日光から出てゐるのである。

百合子は疑乎と見成つて、繰返し／＼讀むであらう。

(十六) 執事の出發

二日ばかり経つて、道雄の許へ一通の書面が日光から来た。

道雄は例の書齋で、執る手も遅しと開けて見ると、却々長い書面である。これは

百合子とあるのだ。

日光へ来て見たが、五百重子のゐさうな場所は見當らない、多分日光は探偵が激しいので、他の地へ轉せられたのであらうといふことや、松本直子さんに宿屋で逢

つて、「おや、松本さん」といつたら叱られて、松の本なら木の下だから、木下直子と變名してゐるのことでしたから、自分も春野百合子が急に可厭になつて、連れて来た侍女と相談の末、百合野春子と改めたから、もし手紙を下さるならさう書いて下さいといふことや、圓齋の奥さんになり済した松本改め木下直子夫人は、明朝中宮祠へ再度行くといつてゐたなど、その間の消息を委しく認めて、最後に直子さんから成功の曉までお手紙は上げないから、手紙に直子とあつたら、萬歳を三唱して封を切つて呉れとの傳言だなどしてある。

讀終つた道雄は少時考込むであらう。

午後になつてまた一通、これも日光の消印があつて、出し人は津村欣一とある。

先日は参上失禮を冒頭に、三日ばかり前に當地へ来たのである。

「津村はまた出かけたのかしら、それにしても日光へは何しに行つたのであらう。」と獨言ちつ、一通讀むで、卓上に置いた。

爰へ案内されて這入つて来たのは、黒田六藏といふ、盛岡家の執事である。

「や、これは若様、御勉強でござりまするか、奈うも、過日は飛んだ失禮を申上ました。あの節にまあ、種々御心配でござりまして、まあ、何しろ、まあ。」と挨拶する。

「その後、五百重子さんからお音信でもありましたかね。」と挨拶の後、道雄は六藏の顔を見てかう聞いた。

「はい、そのことでござりますが、誰も日光ごばかり存じてをりましたか、意外にもその、此方様へは奈何でござりまするか、今朝でござりまする、かういふ書面が意外な方面から参りまして。」とはかきを出す。

道雄は受取つて、少時見てゐたが、呆れたといふ調子で、「へい、愕いたものですね。今朝来たのですつて？」

「はい、今朝でござりまする。で御前が、もしも此方様へも参つてをりますかかも知

れませんがござりまするが、兎に角餘り豫想の外でござりまするで、一寸お知らせ申したがこのことで参りましてござりまする。」

「はあ、さうですか。」とまだそれを眺めてゐる。

「正しく其處にお在とあらば、手前でもお迎へに参らなければならん次第でござりまするが、奈何なものでござりませうな。或はまた日光のやうなもので、この後また他の方面から手紙でも参りますやうでは、誠に取付き處がござりませんが。」

「さうですね、何しろ爰にゐるとしたら、直行つて調べなければなりませんな。奈うですね、貴下が一つ行つて捜しては。」

「左様でござりまするな、實は、御前もさう仰せられるのでござりまするが、一應此方様の御意見を窺ひました上で、若様もさうせいとなれば、充分一つやつて見やうとは存じますでござりますが、それなれば私が参りましてもお差支へはござりませんか。」

「さうですね、まあ行つてお捜しなさる方がいゝだらうと思はれます。併し成るべく、このことは秘密にして、やらないといふと、新聞社の連中にも知られると、日光のやうなことになるですよ。」

「はあ、日光へはそんなに手が廻つとりますでござりまするかな。」
それから、色々何やら手筈を定めて、明日二番で新橋から六蔵が出發するといふことになつて辭し去つた。

後で道雄は手紙を認めて、何處へか出て行つた。

(十七) 果してうれ

中宮祠の唯ある旅店の門口に、二人の紳士が、何か女中と密語してゐる。

「はい、あの、東京の何でも、華族さんのお嬢さんらしい方ならお泊りでござります。」

「二十一二といふ處だね。」と駄目を押したのは津村君である。

「で、盛岡とか、五百重子とか呼んでゐないかへ。」と切込むのは吉川君だ。

「さうは仰有つてませんでした。何でもお侍女らしい方と、丸鬘にいつた奥さん風の——これもお若いのですけれど、三人きりで。」

「ふむ、丸鬘？」と津村君は、ポケットから手帳を出して、一寸二三枚繰りながら

「その丸鬘の女といふのは、木下直子といふのぢやないかね。」

「あゝ、」と思當つたらしく、女中は點頭いて、「さうです、そのお嬢さまがよく直子さん〜と呼んでらつしやいました。」

「さうか、」と津村君手を打つて、吉川君の方を向き、「ぢやあ、奴だな、奈うして一緒になつたのだらう。」

「さうだね、何しろ丸鬘の直子といふ女は注意人物だね。」

「さうだ。それで、」と女中の方を向いて、

「そのお嬢さまといふのは、頗る美人だね。」

「はい、それはもう、水の垂れるやうな……妾たちにもさう見られるでございませうから、殿方の貴下がたには……は、まあ後を尾けて行つて拜んで御覽なさいよ。」

幸、明日は華巖へお行ださうですから。」

「華巖へ？明日？其奴は險呑だな。」と吉川君が眉を顰めれば、津村君は、

「併し、君、さう知れ、ば此方のものだせ。締めく、いよくそれに相違ないよ。」

と女中に向つて、「で、明日何時頃だらう、解らないかね、その出かける時間は。」

「わ、それは、」と考へてる。

「困つたね、それが解らないでは。」

「何有、朝から張つてゐれば、さうぶまつてゐるんだから、奈うしたつて出かける處に會ふよ。」

「それも併し、餘り……もしも、今日は少し遅くなつたから、なんて伸されでもす

ると、張損だからね。」

「それもさうだね。」

二人は困つたらしい顔つきをした。

「一寸聽いて参りませうか。」

「うむ、さうして呉れ、ば都合がい。」

「では、一寸お待ち下さい。」と女中は奥へ行く。

「ねね君、奈うやら、苦心の甲斐があつたね。」と津村君がいへば、

「さうさね、もうかうなれば逆がしつこはない、袋の鼠だ。」

「さうだ、明後日の紙面には、五百重子の行方といふ題標で、この苦心を三四段に書いて、大いに世人を愕かせるんだね。」

「愉快々々、もう今夜あたりから、原稿を書きかけてもいいね。」

「まあもうい、時分だよ。」

爰へ女中は再度出て来て、

「奈うもお待たせ申しました、確としたことは解りませんが、明朝早くお出かけたさうでございます。」

「あゝさうか、其奴は辱けない。」

「それから、まだ聴きたいが、その連中に一緒やあるまいがしかし車夫鉢——今などはどんな風躰だか知らないが、車夫でもしさうな男は……尋ねても来はしないかね。」

「いゝね、別に……尤も、さういふやうな人を探すやうなことは、その奥さんとお嬢さまのお話の中にも、一寸窺つたことがございますか。」

「さうか、それはまあいゝとして、本人さへ見付ければ、それで此方の役目は済むんだから……何しろ有難い。」と津村君は紙に少し包むで、「これは少ないけれど、紙でも買つて呉れないか、」と女中に渡す。

(十八) 百日の説法

翌日例の二人は、この旅店の前へやつて来た。まだ一行は出まいと思ふのでか、その邊を行つたり来たりして、容子を窺つてゐる。ものゝ三時間もかくやつてゐたが、三人連の婦人は出て来ない。

もう根が盡きたと見て、津村君が、

「君、奈うしたのだらう、」といひ出す。

「さうだね、奈うしたのだらう、明朝なんて、もう十一時だが、朝ではなくなつたせ。」

「止めたのかしら。」

「そんな筈はあるまい。天気はこんなに上等だし、どんな寝坊だつて、もう皆起きてるだらう。」

「それはさうだが、午後に延したのぢやなからうか。」

「何とも知れないが、少し吉川君考へて。」

「あの女中め、我々がかうだと話したのぢやないかしら。」

「そんな筈はないよ。あの女中は確かだ。」

「いやに肩を有つて受合ふせ。」

「受合ふといつて、僕はむかしから奴の性質は知つてるんだよ。この前彼所へ泊つて、充分見込むで置いたのだ。」

「何か思召にでも叶つた話ぢやないか。」

「馬鹿いふな。」

餘り幾度も店の前を往來されるので、旅店の番頭らしい男が出て来た。

「君、あれに聴かうか、」と吉川君が番頭に指をさす。

「それより、昨日の女を呼出して事實を聞いた方がいゝよ。」

「さうか。」といふ處へ、番頭近づいて、二三度頭を安く下げ、

「あの、妙な申分でございますが、手前共の店先を、先期から幾度となくお通りの……それに、店の中を何か……その、主人も心配いたしましたして、もしや何かの間違ひで、……いやなに、手前共のお客様に御用でもおありでございますなら、何卒御遠慮なしに、店へお遣入りになりました、帳場へお仰下さりませれば、奈何やうともその……。」

「いや、さういふ理由ではないのです。」と吉川君は、津村君の方を向いて、何とかいへといふのを態度で示す。

「いやね、あの、おとよさんが見えないかと思つてね……一寸、そのおとよさんに用があるんだ。」

「はい、おとよ……女中のおとよでございますか。はい、誠に……お早くさう仰有つて下さいますと好都合でございましたが、唯今、一寸、お客様の御供で、今朝早

く出かけましたもので、賊にお氣の毒様でございりますが、今夕は歸つて参る筈でございませうから。」

「あゝさうかね、さうすると……困つたなあ。」と津村君は困つてゐる。

「誰……お客といふと、あの女連の三人の、あれではないですか。」と吉川君が捜りを入れる。

「はい、左様で……。」

「わゝ？あの三人連の？」と津村君は驚いた顔をする。

「へい。」

「其奴は困つた、何時頃出たね。」

「わゝ、今朝早く、左様、七時半頃でございました。」

「ふむ。畜生……。」

「君、矢張内通したんだせ。吉川君がいふと、津村君も今更何とも答へられぬ。」

「もし御用でもござりますなら、私で解りますことなら、御申置を願へますれば、左様申しますでございませうが。」

「いや、それには及ばん、」と向直つて「君それなら直ぐ追駈けやうい。」

「さうだ、さうしなければならぬ。爰で逃げられては百日の説法……。」

「華嚴へ行つたのだね。」

「はい。併し、奈ういたせ、他處へも廻ることございませう。」と番頭手持無沙汰だ。

「何しろ追はう。」と二人は駈出した。

(十九) 袋の鼠

二人は大急ぎに、華嚴の瀧まで来たが、それらしい人影は見ねぬ。滔々と落ちる瀧の傍に、交番がある。これは、餘り厭世家が多くなつたので、こ

の用心に建てられたのださうである。

「調査は二人を怪しく思つたものか、近寄つて何かいほうとしてゐる。」

二人は瀧を見に来たのではない。もしやあの婦人連の中に、爰へでもといふ懸念も内々あるので、瀧壺の沸立つやうな中を覗いた。

「もし〜」と調査は慌てて呼んだ。

「は〜？」と吉川君が振り返ると、調査は二人を見て、

「貴下方は瀧見物ですか。」

「はい。」と津村君も驚いて振向き、「いや實は、少々その尋ねるものがあるのですか。」

「さうですか。」と少し調査は不安らしく、

「奈ういふ人です。」

「その、婦人なのですが、かう令嬢風の、二十一二のが、三四人連でこの邊へ来な

かつたでせうか、お氣が注ぎませんでしたか。」と吉川君の言葉に續いて、津村君は、

「頗る美人なのです。」

「あ、さうですか、中禪寺の方から来た。」

「はい、さうです。」

「御覽になりましたか。」

「はい、今朝来ました。」と調査も見たものと見える。二人は得たりと、

「何方へ行きましたか。」

「この上の方へ行きました。」

「さうですか、何かいつてはゐませんでしたかしら。」と津村君がいふ。

「左様、南岸橋といふ言葉を一寸耳にしたやうですが、確とは覺わませんな。」

「いや、奈うも有難う存じました。」

これで二人は行先を察して、瀧の上へ道を執り、大尻へ南岸橋の處まで出たが、

見ない。

「君、奈うしたんだらう、僕はもう可厭になつたせ。」と吉川君は少し参りかゝつた。

「僕もいやになつたよ。何しろ腹が空つて来たね。もう正午過たらう。」

「もう先に過た。」

「何處かで、一寸やりたいね。」

「併し、爰まで追つて来て、逃すのも残念だからね。」

「さうとも。」

こんな話をして南岸橋を渡つた。先方から二人の書生らしい男が、何か話しながらやつて来る。

「僕はあゝいふ奴を東京でも餘り見ないね。」

「併し、僕は丸鬘の方を執るよ。餘程世話に碎けた處があつて、僕にこれからお下

りでございますかといふあたり、確かに處女でないから嬉しいよ。」

「中禪寺湖の一週なんて君がいゝ加減をいつて、これから中禪寺への路なんか聞くから……併し、かういふ處で美人に會ふと、格別いゝね。」

「あれは君、東京でも華族とか何とかいはれる處のだけ。丸鬘は令嬢の嫂と銘定したな。」

「併し直子さんと呼んでゐたせ。」

「さうか、君は却々油断のならん男だ、何時の間にか名まで覚えて、はゝゝ。」

「令嬢の名は知らないかい。」

「僕はこれで名などには注意しなかつた。」

「はゝゝ、さうか。奈うかして聴きたいと思つたが、一同お嬢さまごばかりいつてゐてだめだ。」

「何しろ、今頃は光見物に来るやうでは、唯の人間ではないよ。我々のやうな素浪

人とは違ふからな。」と橋を渡り過ぎる。

此方の二人はこれを耳にすると、吉川君が、

「津村君、聞いたか。」

「聞いたよ。確かにこの道だ。」

「天祐だね。」

久しぶりで天祐を口にした。

「もうかうなれば、實際袋の鼠だ。」と津村君も勇み出す。

(二十) その空室

それから二人は、大急ぎで進むで、この先の名所舊跡を巡るらしい婦人連を追つた。

歌の濱へ行つたが見ぬ。寺が崎へも歩をつけたがそれらしい影さへない。

會ふ人ごとに驚くことにして、それをやると、彼方へ行つたといふ。日輪寺、松崎、老松崎、白岩、はては上野島まで乗出したが知れない。

日もはや暮れさうになつた。もうかうなつては歸路に就いたらうと、今度は引返して、中禪寺まで来た頃には、もう町の爰彼處に灯が燈いて、四邊は暗くなつてしまつた。

終に二人は、この一日を徒にしたのだ。併し、まだ思ひ切れないものか、途上、再度かの旅店へ今夜は宿つて、この婦人連を搜つて見やうと相談が纏つたのである。

二人はこの夜例の宿屋へ泊ることゝなつたので、少々の手土産を買つて、おとよさんとかいふ女中と、今日の番頭との機嫌を取るなど、一寸苦心した。這入つて案内されたのは、二階の三番といふ、静かな八疊である。

このうちにおとよさんがやつて来る。

十五錢ばかりの土産で、ほく／＼させて、置いてかの婦人連に近付かうといふ策だ。

「あおとよさん、これは今日一寸買つて来たのだが、當分厄介になるから、まあ取つて置いて貰ひたい。でそれから、後で番頭さんを一寸呼んで呉れないか。」

「はい。奈うもこんな御心配なすつちや、真箇に……お氣の毒様でございますね。」

「うむ、今日はお供だつたさうだね。」

「それはいゝが、一日追駈け廻つて、終々疲勞儲けさ。は／＼」と吉川君がいふ。

「あら、さうでしたか、まあ驚きましたことね、御冗談だらうと思つてたら、真箇に？まあ、それはお氣の毒様でございますね。」

「それはいゝが、ね、一躰今日は何處を歩いたんだい。最初華巖だらう。」と津村君が徐々不平らしい調子になる。

「は、／＼、そこからあの歌の濱へ参りまして、レーキホテルでお晝食。」

「さうか、此方は晝食抜きだぜ。」

「は、／＼、大變にまあ。」

「それから何處へ行つたい。」と吉川君が後を引張る。

「それからね、あの邊は悉皆御案内申しましたんでございますよ。」

「で會はない筈はないがな、併し、まあ、今更詮方がない。何しろ、もう爰へ來れば安心だね、そうだらうおとよさん。」

「は、／＼」と笑つてゐる。

「例のは何處にゐるね、」と津村君が少し聲を低めて聞く。

「あの方たちですか？」

「うむ。」

「もう在つしやりやしませんよ。」

「わゝ？何だつて、そんな筈があるかい、からかひこはなしたよ。そのお顔が拜み
たさに、能々當店へ宿換へをしたんだせ。」

「おほゝ、ほゝ、まあ、呆れたもんですことね。もう先に……。」

「先に？」と吉川君も呆れた。

「それは眞實かい。」

「わゝ、嘘だと思召すならこの家中捜して御覽なさいませ。」

「さうか、奈うして、」と津村君かいへば、

「何處の部屋にゐたんだい。」と吉川君も少し慌てる。

「お二人さんが大層御執念で在つしやりましたから、その空いた爰へ御案内申した
んでございますよ。」

「ちやあ、この室にゐたんかい。」と吉川君も今更らしく愕いて、「何處へ行つたん
だ。」

「東京へお歸りでございませう。」

「大變早いぢやないか、」と津村君がいふ。

「わゝ、もつとお在の積りだつたんでございしましたが、急に東京からお手紙でし
て。」

「東京から？手紙で？……可怪しいな。」と一様に二人は考込むた。

「おほゝゝ、口惜しいんですか。」

(二十一) 畜 生 殘 念

日光の停車場では、六時十分の上りがもう間もなく出るので、却々の賑はいだ。

プラットホームへ荷物を運ぶ驛夫、出札口に先を争ふ客、汽鐘車の叫び、改札へ急
ぐ下駄の音。

今一二等待合室から出た婦人の三人連、一人は九齒、一人は合襖風、今一人は侍

女らしいので、話しながら改札口へ進むだ。

「直子さん、あの、レーキホテルの窓の下を通つた二人、貴女知つてる方なんですか。」「と令嬢がいふと、丸髷は一寸點頭き。

「あれが新聞記者なんですよ。」「

「あゝ、さう、妻もさうだとは思つたんですけど。」「

「あれは妻と一緒に箱で上野から来たのよ。」「

「それと知つてらつしやるの?」「

「わい。」「

「さう、何しに来たんでせう、矢張五百重子さんの一件で!」「

「えい、さうなんです。」「

「貴方何だか、あの人だちを避けるやうになんていつて在しつたけれど、何故。」「
「少し譯があるんですわ。」「

「どんな譯?」「

「今に解るわ。」「と少し妙に笑ふ。

「さう、と解しかねたやうにいつて、「あの人達が何でも妻たちに近付かうとしてゐるなんて女中の話でしたが、何故でせう。」「

「何故ですか。」「

「近づかれちや困るの?」「

「えい、成るだけ。」「

「何だか變ね、貴女の仰有ることは。」「

「奈うして、と丸髷の直子は後方を向いて、

「追かけて来るかも知れなくてよ。」「

「さう、早く乗りませう。」「

と三人はプラットホームへ出た。

がらん／＼と發車を知らせる鈴がなる。プラットホームへ出た連中は慌て出す。爰へ二輛の車は馳せ着いた。二人の紳士が慌しく出札口へ行く。

「百合子さん、来てよ、あら、困ること、奈うしませう。」と直子は戻返つて眉を皺めた。

「さう、何處に？」とこれも振向く。

驛夫が急立ちるので、手近の二等室へ這入つた。三人とも窓から此方の方を見てゐる。

「あ、大丈夫よ、もう改札口を締めた、間に合やしないわ。」

「は、大丈夫ね。」

「あ、よかつた。」

三人一様に胸を撫で下すと、汽笛が鳴つて、車は動き出す。

改札口に残された二人は、太息を吐いて、出て行く車を怨めしうに、見むすな

るまで眺めてゐる。

やゝあつて、四邊の静まつた時分、二人は正氣に返つたやうに、

「君、あれに相違なかつたね。」

「うむ確かだ。」

「併し五百重子だつたかね。」

「さあ、それは、何しろ遠くて見ななかつたが、さうらしいよ、後妻といひ、年齢格合といひ、而も、あの丸鬚がゐたのだからね。」

「さうだ、兎に角もう一步で……あ、口惜しい、口惜しいことをしたね。」

「まあ、仕方がない、次ので追付かう。」

「次のは九時だせ。」

「九時でもいいさ、今夜中に東京へ乗込めば平氣だ。」

「九時ので東京へ直ぐ行けるかね。」

「兎に角聴いて見やう、津村君は、驛夫を呼んで、君の九時の奴は連絡があるかね。」

「わ、九時のは宇都宮止りです。連絡は今ので終りです。」と答へる。

「今の？それきりか。」

「わ、さうです。」

「すると、もう今夜中には東京へ行けないのだね、と津村君は口惜しがも。

「畜生、残念だなあ。」

(二十二) 御暢長過ぎる

小田原の海岸を、何を見るときもなく、行きつ戻りつしてゐる老爺がある。もう六十を越したらしい、白七分の黒三分といふ天窓の男が、帽子もなしで、黒袖の三枚

の羽織といふ扮装であるから、一寸人目を曳くのた。もう四五ヶ月も経つたら、東京のものも餘り珍らしくない海岸だが、土地の者さへ遠ざけてゐるこの波打際を、この老爺、さりとは狐にでも憑まれたのか。

それを見に来たのであるまいが、二人の東京かららしい婦人がやつて来た。對の丸鬚で、從容な步調、これも一寸人目を引く人物である。

土地の者の噂が面白い。

「何でもあの老爺は三日ばかり前に、この地へ来たもので、何か年甲斐もない女の爲めに少々發狂の氣味ださか。で、爰へ来た二人は、あの老爺の娘か何かであらう縁付いた先から、老父の行方を探した来たものであらう」とかうである。

二人の婦人は老爺に近づいて、聲をかけたもので、いよくこの噂が事實にされてしまつた。

「もし、と年長な方が、老爺を呼留めた。」

「へへ、」と老爺此方（こなた）を向くと、驚いた顔色で、「やあこれは、松本様に春野様、」
「何をなすつてお出なんですか？」と若い方がいふと、老爺は、
「へへ、一寸その。」
「御運動ですか。」

「あの、黒田さん、五百重子さんの行方はお解りですか。」と年長な方が聞く。

「は、その松本様、」と二人の天窓に気が注いで、「やあこれは、愕（おどろ）きましたな。まあ、お目出度いことで、つひ、存じませんでした。お悦びにも上りませす。」

二人は同時に笑ひ出して、手を振りながら、「似合つて？」
「お、似合ふの何のと申して。」

「は、は、百合子さんと二人でかういふ姿で五百重子さんを捜しに来たんですわ。」
「へへ、」と、少し呆れる。

「ねね百合子さん、」と若い方を見る。

「は、は、黒田さん、疑つてるでせう、直子さんの立案で、」と若い方も笑ふ。

「はは、左様で。いやはや、奈うも油断のならんことで、は、は、お嬢様、却々
隅へは置けませんで。」

「おほ、奈うして、中央に置いても仕方がないんですわ。」
「それはさうと、その、主家のお嬢様ですがな、」と沖の方を一寸見る。

「當地にもお在がないますか、」と百合子がいふ。
「へ、その、お在になりはしましたでござりますが、何でも、一昨日の午前に私

は當地へ着いたしました、それを、今日の午前に爰の海岸から漁船に乗りまして
何でも彼方の方、」と沖の方を指して、「三人に轡を押させてお行になつたと申すこと
で愕しましたわな。それで實は歸りさうなものだと、爰にうろくしどります次
第で。」

「それぢや、その二日ばかりの間見付けなかつたんですの？」

「い、わ、奈ういたしまして、もう目を丸くして探しましたのでござりますが、何
るま、手がかりがないもので、終まあ迂平しとりますうちに、六蔵が来たなとお取
付になつたが最後、汽車では見付かると思つてか、船で……而も漁船とありまして
は、お若いに危険至極でござりますから。」

「さうですね、それぢやあ、もうこの土地にはお在がないんですわね。」

「處が、宿で申しますには、何でも鯛漁の容子が見たいとかで、船を仕立てさせ
たのださうでござりますから、今日中にはお歸りだらうといふことではござります。

何にいたせ、奈うもかうして、我々が血眼になつてお捜し申にも係はらず、餘り御
暢長過ぎますから……。」

「さうですわ、それぢやあ、兎に角お歸りになることは解つてるのね。」と直子がい
ふ。

(二十三) 俄の風雨

「はい、左様ださうで。」

「それなら荷物なんぞも宿に預けてあるのでせうね。」と百合子も口を開く。

「わ、それまでは聞きませんでしたか。」

「さう、それは何處の宿なんです？」

「直この先のでござりますが、それなら、今一應聞いて参りませうか。」

「さうねわ。」と直子が考へると。

「さうした方がいゝでせう。」と百合子がいふ。

「それでは御案内申しませうか。」

「さうして下さいな、三人で聞きに行きませう。」

と相談一決して、三人は海岸を後にして、町の方へ歩き出した。

舊城址の側の、可なりな旅店がそれである。三人は均しく這入つた。

「あの、先刻疑つた、そのお嬢様風の御婦人はまだお歸りになりませんか。」と六藏が聞く。

「はい。まだお歸りがございませんが。」

「併し、お歸りになるのでせうね。」と直子が横から出る。

「それは、奈うも確とは手前に解り兼ねますのでございます。」

「それぢや、お荷物なんかお預けしてあるものでせうか。」と百合子が今度に出る。

「わゝ、お荷物など、申して、別に何もお持参物はなかつたのでございます。」

三人は顔見合せた。

「それに、今朝船をお雇ひになります前に、御勘定等も一切お済ませになりました。すから、此方へお歸は、奈何になりますか。」

「は、それでは、もう来ないを申されたのでせうな。」と六藏が少し憚りてい

よ。

「さうは仰有られませんでした。船といふものは何時奈うして、波に巻かれて沈まないともいへないから、その時當店へ損をかけてはならないから、仰有るので、御一緒によろしうございますと申上げるのもお背きがなく、それで清算をいたしたやうな次第で。」

「さう、それならお歸りになるかも知れないですね。」と直子が駄目を押す。

「で、船はまだ歸らんのですか。」

「小田原の船ですか。」と百合子がいふ。

「はい、この濱の漁師の家から出ましたものでございますから。」

「何處でせう。」

「へ、直、其處でございしますが、何なら一つ聽いて参つて差上げてみようと思ひます、多分まだ歸りますまいが。」

「さうですね、船ですから、」と直子がいへば、六藏と百合子とは同時に、

「どんな間違ひがないともしれませんから。」

「は、では一寸聽て参りますから、少時此方でお待ちを願ひます、と番頭らしい年配の男が下駄をつゝかけて出かける。

そのうちに空が曇つて来る。

「何だかいやなお天気になつて来てね。」

「おや、雨が降つて来て。」

二婦の言葉に、六藏もやうやく天を眺めたが、海の方から真黒な雲が寄せて来た。

「や、これは、」と六藏も口のうちに呟く。

と一陣の大風が吹寄せて来て、豆大の雨は砂塵と共に吹きまくられる。

「船にのちや大變でせうね、五百重子さんは——ねね、百合子さん。」

「さうね、何だか激しい風ですから、」と女二人は心配し出す。

「今頃岸へ上つてをるとよいのですがな。」

爰へ番頭大急ぎで飛込む。

「まだ戻りませんか、」と六藏は遠しく問ひ出した。

「わ、その、まだなのでございますが、今話してをりますうらにこの風——雨も

かう甚いのですから、定めし海も……。」

「さうですね、奈うしたものでせう。」

「困りましたわね。」

「何だか五百重子さんは遺言のやうなことをなさつたものだから、」と百合子は眉を

皺めながら「大丈夫でせうか。」

「奈うも何とも、」と番頭も落着いてはゐぬ、三人は益氣が氣でない。

(二十四) あら常さん

さて五百重子は何故妻を隠してゐるか、去る日抱への車に乗つて出たまでは、何人にも分つてゐるのである。

その日、新橋で一才した買物をして、車夫の常造といふのに、二百圓の金を渡しこれでお前は當分隠れてゐてお呉れ、妻は少し考へがあつて、それから汽車に乗るのだが、このことは知れないやうにして貰ひたい。それからこの手紙は日光へ行つて郵便函へ投込むで呉れないかと、また幾何の金を渡した。それぎりだといふことは、數日の後、日光で車夫の常造を引捕へたとかの、さる新聞が得意氣に報じた處である。

その車夫、常造は、その新聞社の探訪とやらの某が、その日に盛岡家へ連れて来た。而して、某が口を利いたので、子爵も黙つて以前の通りに使ふこととなつた。常造は別に大した罪——むしろ、生命を守つたのであるが、それでも——何となく氣が咎めて、程なく子爵家から暇を貰つて、稻松をかいふ、車宿の借車に、裏長屋を張つて、妻子を養つてゐるとか。

この常造以外に、五百重子の手が、りはないので、今以てよく新聞記者の來訪を受けることが屢である、今も、これから出かけやうといふ處へ、一人の若紳士がやつて来た。

「常造さんは自宅に居るかね。」

「はい、手前が常造で。」

「一寸顔が借りたいがね、奈うだらう。」

もうかういふことには馴れつこであるから常造も、吞込み顔で心よく、

「ね、」と少し考へて、「ようござんす。」

「仕事の出かけだらう、氣の毒だなあ。併し迷惑はかけないから。」

「へい。」

「一寸其處まで来て貰ひたい。」

これから、常造は布被の儘、若紳士に尾いて、「一寸行つて来るよ。」か何かの拾詞を女房に残して行く。

新橋を渡つて、博品館の處を左へ曲つて一二町、また左折して、唯ある旅店の三階建、爰まで、來ると若紳士は、「一寸待つて呉れないか。」といひ置いて、とん／＼と上へ登つて行つた、常造は、かういふ處へ來ると知つたら羽織の一枚も引かけて來るのだつてといふ顔色で、入口に控へてゐた。

少時して出て來た若紳士は、常造に向つて前よりは少し丁寧に、

「さあ、此方へ上つて呉れ給へ。」

「へい。」と隅の方へ跣足足袋を脱いで、導かれる儘に、右へ左へ、廊下を傳ひ、螺旋になつた階段を登つた。

取付から一、二、三つ目の襖へ手をかけて、若紳士は先へ這入り、「さあ、此方へ。」

「へい、いや奈うも。」と四邊を睥はし初めて、進められた、厚い褥の前へ立膝する。「さあ、遠慮なく。」と褥を少し押しして、煙草盆など出し、「一寸待つて下さい。」と若紳士は出て行く。

常造は半ツポンの破目など氣にしなから、室内を睥はすこと前の如しで合點の行かぬ面持だ。狐に憑まれたといふのはかういふのではなからうと思つたのであらう、眼を摩つて見たり、膝をつめつたり、いろ／＼と考へてゐる。

處へ女中が茶菓を運び込む。

車夫の身としてこんな待遇を受けるのは初めてだ。

女中は茶を汲むで、常造に進める。

「やあ、」と少し頭を下げて、一寸その女中の顔を見る

「あら常さん！」

「お。」

「まあ、久瀬ね、相變らず、」と愕いたらしい顔で、常造を見る。

「ほんとうに久瀬だね。」

かういふ處へ、先刻の若紳士と、もう一人やつて来た。

(二十五) 假の不義者

馴れてるだけに、女中はこの儘濟して去つた。

「いや、お待たせしました。」と若紳士は、常造に一寸解釋して、堤の立派な筋骨逞しい一人の紳士を上座に請じた。

「いや、貴下が常造さんですか、初めて……や、奈うも態々呼びして濟まんでした。」

と町亭に挨拶されて、益々常造は面喰ひ「へむ」とばかりである。

「實はな、貴下に、極内々でお聴きしたいことがあるですが、何卒……かういふ處だが、この男と二人ぎりだから、一つ充分委しく、御存じのことだけいつて頂きたいです。」

まるで法廷へでも曳かれた思ひで、常造は怖る／＼「へむ」と答ふるのだ。

「先生、」と若紳士は何やら密語いた。

「うむ、さうだ、」と紳士は點頭く。

「では、一寸行つて参ります。」

「うむ、」と鷹揚にいふ。

若紳士は出て行つた。

「さあ、樂にして下さい、」と常造の苦しうに四角に坐つてるのを見て、「奈うもこの四角、坐るといふ奴は、私なども馴れんから苦しくていかん、は／＼、」と自分か

「箕居に直つて、外でもないが……といふこともう多分お察したらうが、あの貴下の以前をつた盛岡家のことだが、五百重子を曳いて出たのは貴下ですな。」

「へ、さうでござんす。」

「それで、貴下が曳いて出た時に、新橋で下りて別れたといふことは解つとるが、それ以前に何か五百重子から話されたことでもあつたですか。」

「へ、何にも、あの二三日前だと覺えますが、例の通り、お庭のお掃除をいたしとりますてねと、椽側にお嬢様が立つておいでになりました、常造と呼びなす、へ、何ぞ御用で……といひますと『今お茶を入れたけど、一人ちや詰らないから一杯呑むで呉れないか』と仰有るのです、それから『へ、有難う存じます』と押太く上りまして、茶を御馳走になりました、その時……わ、平常から、私どもを相手にお話はなさいます至つて氣さくなお嬢様でして……わ、で『お前の故郷は何處だ』つて、お聞きですから、生れたのは東京ですが、足尾に親父もお母もどり

ますと申しますと、『さうぢやあ江戸つ子だね、意地で世を渡る張のある男だね、妾もさういふ夫を有つて見たいよ』と無論御冗談ですが、さう仰有るのです』と一息吐く

『す、この餘り平常から品行はよくない方たつたでせう。』

『い、わ、處が、奈ういたしましたして、もう至つて御前が御嚴格な方でござんす、お嬢様……も平極そのお宜しい方で。』

『さうか、それから奈うしました。』

『それから、私も、御冗談はつかし……』と申しますと、『冗談でも何でもないが、それに就いちや折入つて頼みたいことがあるが有いて呉れないか』と仰有るんです。私も何だかその時はぞつと程妙な氣がいたしましたして、『何でございませう。』

『外でもないがね、お前一時不義者になつて呉れないか』『わ、ッ、滅法な、』と私は愕きました。すると、『何も愕くことはない、少し考へがあつて、妾はこの東京に

ゐたくない、それに就いちや、お前……奈うせ後で解るけれど、一時不義者の積りになつてお呉れでないか。」とかうでせう。私は何だか合點が行かす。「御主人様のことでございますから、忠義になりますことなら、何にでもなります。」とさう、さうして呉れ、ば妻も安心だよ、それではね、今日から不義した意りで、少し前以て狂言をして置かうと思ふんだが、お前何かい、工夫はないかねわ。」「左様でござんすな別談これぞ申す工夫もございせんが、せいふ、噂に當つて見ませう。」と申しましたんで。」

(二十六) どうしてこんな

常造は語を聞いて、「何のことだか、さつぱり解りませんでした、そんなことでお暇申して、それから、まあ、内々ですが、お嬢様をいやに褒めて、せいふ、當り散らかしてやりました。それから、うの後ある日の朝でした、これから、お友達の處まで行くんだらつてつづつて、まあ、嬢様を置いて出ました。それで、公園まで行きました、何方へ参るんですと、氣の利かない話ですが、行先を聞きますと、新橋までといふので、新橋まで参りますと、爰でい、さお下りになつて、實は今日これから、新橋から汽車に乗つて行かなけりやならないんだが、約束の通りお前は不義者になつて、少時の間足尾とかのお父さんの處へでも行つて、呉れ、妻は爰でお別れするが、呼びに行くか、使をやるまで待つてゐて貰りたい、もし旨く行けば、乾度お禮はするよ、車夫で何時までも置きやしない、おかみさんにはお氣の毒だが、明さへ立てば樂は能るやうにして上るから、少しの間辛棒してゐてお呉れ、これは少しだが自分の小遣ひにと二百圓下すつて、それから手紙を一本お出しになつて、序に日光でこれを出して呉れつて、日光の旅費まで別に下すつたんです。」

「ふむ、その後は知らんのですな、それから貴下は何うしたです。」

「わ、車を一寸知つた家へ預けまして、友だちにしてゐたあるお屋敷の書生を訪

ねて、爰では唯、少し女房に申譯のないことをして来たから、これから日光へ高飛しやうと思ふといふんで、一寸一枚茲で着換へを用意して女房へ端書を一本頼むで飛出しました。」

「ふむ、それで、日光から手紙が来たのか。」と紳士はひとり點頭いてゐる。

「で、日光に三日ばかりをりましたが、何だか東京から追手が甚いので、足尾へ逃出さうとしますと、途中で終々ふん捕まりまして。」

「さうか、併し貴下が不義者でないことは解つゝるが、その他に何も知らんですな。」

「へ、それつきり、お嬢様のお行方が今以て知れませんかと窺つて、今更愕まします。」

「何せ、容易ならんことです。」

爰へ先刻の若紳士が歸つて来た。

「先生、御都合がよいさうですから。」

「さうか、ではこれから直ぐ行かう、兎に角よいやうに君からやつて置いて呉れ。」と常造に向つて、「いや、何うもお暇をかけたな、有難う、それで解りましたです、もう時刻ですから、悠々飯でも食ふて行つて下さい。それではこれで失禮します。」と紳士はいそ／＼出て行つた。

若紳士は席を直つて、常造に向ひ、「何うも御苦勞でしたね。」

「いね奈ういたしました、ではこれで、もうお暇をいたしたいもので。」

「あ、少しお待ち下さい、今仕度をさせましたから、まあ。」

爰へ女中が洋食の午食を運込む。

「あ、来た、では、やつて下さい、詰らんものだが。」

進められて、食ひ馴れの洋食を、腹一ぱいに詰込むた。

「あの、貴下は今日は仕事を休むのですな。」

「へへ、まあ。」

「あの、これは甚だ少ないが、主人からの命令だから、今日休ませた罰金として、取つて置いて下さらんか。」

「い、わ、もうどういふことは、と辞退する。」

「何有、さういはずに、何卒取つて置いて貰ひたいです、主人から私が預かつて、實際失敬な話だが、一日の仕事を休ませては……だから執つて置いて下さい。」

さういはれて、常造もいなみがたく、これを受けて、歸つた。

下の廊下まで来ると例の女中がある。

「常さん、」
「なに」と、立留つて、女の顔をしげく見たが「お瀧さん、お前奈うしてこんな……。」

三十七 二組の見合

日比谷公園の松本樓上、一室に卓を圍むでゐるのは、四人の若い男女、給仕人が二對だと蔭口をしるゐる處へ、一人の紳士が訪れて来た。

此の四人といふのは、狩間道雄と、友人の津村欣一、女の方は松本直子と春野百合子、今將に五百重子の噂最中である。

「直子さんの九番には愕きましたよ、何しろ私は非常に怪しみました、これこの通りと懐中から、手張を出して、『木下直子、麻布區四本木二の四……二十八才、は、字都宮で宿張を寫したのです、實際二十八才と見えましたからね』と、欣一が笑ふ。」

「は、は、さうでしたか。」

「今日は二十三に見えましたよ。」と道雄がいへば、百合子も笑ひながら、

「ほんとうに直子さんは、あの姿が一番よくてね。」

「百合子さんのも似合ふわ。」と直子も口を出した。

「併し、この住所氏名には何か因縁があるのでせうね。」

「以前宅にゐた女中の住所を借りて、松本なら木の下だから木下としたんですの。」

「は、一時は非常に惑はされましたよ。」

「さうですか、罪を造りましてね。」

「それに百合子さんを五百重子さんと間違へて、……それが、今日唯今、百合子さんに日光一件を疑ふまで、些とも疑はずにゐたのなどは何うも……尤もお目にかいた理由でないし、人相や年齢合で、宿屋のいふのと此方の探すのと符合したものですからね、それで必定それは丸鬚——重子さんのことですからその丸鬚と一緒に五百重子さんがゐるのに相違ないと早合點して、は、は、は。」

「これであんなに髪を尾けては、は、は、と百合子は思出して笑出した。

「妾、何だか氣の故で、津村さんと一緒に箱に乗つた時なんか、随分きまりが悪うございましてわ、いやな眼色で、時々じろく／＼なさるんですもの、妾だつてことをもう御存じになつてゐて、妾の丸鬚を疑つてらつしやりはしないかと思つて、それでも何だか、離れたくないやうで。」

「其處が、その謂所……。」と道雄が笑ふ。

「さらですわね。」と百合子が相槌を打つ。

直子と欣一は少して初心らして赧くなつた。

「それにしても、もうお出になりさうなものですね。」と百合子は外を眺める。

「そら、お待かねと見て……。」と欣一が仇討にかゝる。

「あら！」とこれも紅葉を燦める。

「は、は、今日はこの文明的見合ひといふ御注文で、私も却々忙がしい。」と道雄が云ふ。

「内々少々妬るね」と覗くやうに道雄を見て、「五百重子さんは何うしたのだらう。」と欣一が笑ふ。

「もうい、やね、他人のことは」と道雄が打消す。

「あら、何方か」と直子のいつた時、扉が外から開られて、一人の紳士が這入つて来る。

「やあ。」

「やあ」と、新來のと道雄とが一聲づゝ割合つてから、一同の紹介挨拶が済むで、席が定まる。

「黒井さん、この百合さんが非常にお待ちかねでして、せひとも一度お目にかゝりたい……のだが、何うなさつたのだらうと。」

「いや、それは」とこれは世馴れたと見えて、百合子に向ひ、「兼々狩間さんから何しとつたですが、何卒、以後よろしう。」

「はい。」といつたぎり、真紅になつた。

今日は松本伯の令嬢直子と、津村欣一といふ許嫁との、見合ひをかねて、春野子爵の令嬢百合子に媒介の勞を執つた道雄が黒井時雄といふ米國公使館付武官の、公用で歸朝したのを幸、内々で見合せやうと、手輕に爰で會したのである。

さうかうしてゐるうちに、用意のものが運込まれる。

(二十八) 同 じ 宿

芝公園の三線亭で、今宵は二組の結婚式が執行されるのだ。

それはかの津村欣一と直子、黒井時雄と百合子のそれである。媒酌人の道雄はそれこれと世話をしてゐる、もしもこの媒酌人に令夫人があつたらばと、會する人は何れも嘆じてゐた。

何故にかく早く纏められたかといへば、黒井の出發が、急に早められたので、新

婦新郎をこの期に伴はせたいといふ道雄の素意に外ならぬのだ。それに津村も渡米といふので。

かくて、二組の新婦新郎は、馬車で午後五時といふに、前後して参會者に迎へられた。これで式は初められるのだ。

式が終へて、これから會食といふ處へ、慌しく走込むものがある、といふ噂が起つた。

何事であらうと、道雄が會食堂の外へ出て見た。

一人の男が今、爰へ急いで来る容子だ。

「もし、何です、何御用です。」と女中や給仕がこの男を支へて、此方へ來させぬ。其處へ道雄は近付いて、よくよく見ると、盛岡にゐた車夫の常造であるのだ。

數日前、渠の談話を委し聽いて、黒井が話した五百重子の假の不義者だ。

「何だ、何か用か。」と道雄は聞いた。

「はい。」と道雄を見て、「やあ、これは狩間様の……奈うも……。」と兩手を支へられながら、もじ／＼してゐる。

「奈うしたんだい。」

「へ、その、大變なことで……。」

「その、お嬢さまが、その。」

「お嬢さまが奈うした、お嬢さまとは、五百重子さんのことかい。」

「へ、え。」

「五百重子さんが、奈うした。」と道雄も少し慌て出した。

「あの、東京へお歸りで。」

「わ、東京へ。」と驚いた。

爰へ、津村と黒井の新夫婦、矢張これを聽いて一様に驚いた。

五百重子を探して、自分等を媒酌して呉れた道雄に、媒つ義務を有つてゐる津村黒井の新夫婦は、餘り以外な方面から、この言葉を聞いたので、等しく呆れたのである。

「君は奈うしてこれを知つたのだ、さうして今何處にゐるのか」と津村は常造に向つて聞く。

「貴下は何時見たのです。」と黒井は常造の肩に手をかけた。

「やあ」と黒井の顔を見て、「旦那、先日は奈うも、飛んだ……實はあれから……へね、まあ不思議にもお嬢様の手が、りが出来まして、へね、」

「では、あの歸途にでも逢ふたのですか。」

「いわ旦那、まあお聞き下さいまし、かうなんで、」と話出した。

それは黒井に旅店へ呼ばれて行くと、遇然に噂の妹が彼店の女中をしてゐたこと、それから黒井に、いふ話はしたやうなもの、何といふ人だか解らず、おま

けにお金を貰つたり、御馳走されたりして、狐に憑まれた心地で、名を聴かなかつたのに心注いで、歸る時噂の妹のお瀧といふのに楮下で會つたのを幸、それを聴いて別れたこと、それから二三日して、この話に女房がお瀧に會ひに行つたこと、その時、ちらとお嬢さまを見て来たこと、嘘だらうと怪しみながら、今日行つて、お瀧が不在で却つてお嬢さまにお目にかゝつて、また幾分のお金を頂戴に及んだことまで話した。

「さうすると、私の宿に泊つてゐるのですな。」

「さうでござんす。」

「ではこれから直ぐ歸らう」と、黒井が少しく慌て、新婦百合子の顔を見る。

「だけども、それでこれから何處かへ行くと仰有りやしなかつたの？」と百合子が常造に聞く。

「お、これからまた……。」

(二十九) 今の車

さて五百重子は、奈うんばことで歸つて来たか、圖らずも常造が會つて来たといふことで、同じ旅店にゐて、その顔の分らない悲しさに、黒井は今まで知らずゐたのを大いに耻ぢて、兎に角、一歩遅れても、早速車で宿へ飯ることゝした。参集した者には、この由を告げて、八時頃散會となつて、一同は三線亭を出た。残つたのは道雄と、津村新夫婦とで、黒井に約束した電話の報知を待つてゐるのだ。

黒井は新夫婦で先歸宿して、五百重子の在所を確かめた後、電話でこの三人を呼ぶことに定めて、三線亭を出たのであつた。常造は御苦勞といふもので、また幾何を頂戴して歸つた。

三人は幾つて、半信半疑で待つてゐる處へ、給仕人が這入つて来た。

「あの、唯今電報が参りました。」

「何だ、何人からだ、」と道雄は手早く受取つて、表面を見ると、「サンエンタイエナクロキユリコンムラナホコ」とある。

「あ、直子さんです、」と直子へ渡す。

「さうですか、」と受取つて、直子が開いて見ると、「ゴケツコンヲシユクス、イホエコ」とあるので、「まあ、」と思はず叫んだ。

この一聲に、何事かと、二人は其處へ天窓を寄せた。

「や、五百重子さんだ。」

「成程、さうすると事實だね。」

「發した局は何處です。」と道雄がいへば、

「新橋とありますわ。」

「ではいよく相違なした。」

「何處へか行きはしないだらうか。」と津村が少し心配し出す。

「何とも知れないが。」

「五百重子さんが旨く黒井さんと出會へばいいんですがね。」

こんな話をしてゐるうちに「狩間様、電話でございます。」

ござんなれといふもので、道雄は立上つた。津村夫婦も手に汗を握つたのである。

十分も経つてから、道雄が歸つて来る。

夫婦は同時に「奈うでした、黒井さんですか。」

「わゝ、残念なことをした。」

「會へなかつたんですか。」と直子が心配さうにいふ。

「わゝ、と力なく道雄が答へる。

「わいのかね。」

「わたことはわたのなさうだが、何でも九時二十分の汽車で新橋を出發するといふことで、今、百合子さんだけ、停車場へ車を飛ばせたが、もう十分しかないから、間に合ふまいといふのだ。」

「ふむ、さうすると、矢張新橋から……成程、その出かけに新橋でこの市報を打つたのだね。九時二十分といふと、時計を出して見て、「まだ十五分あるが、一つ無駄だと思つてこれから出かけて見やうか。」と、新妻君に向つて、津村は相談顔である。

「さうね、十五分あつたら間に合ふかも知れないわね。」

「ちやさうして呉れ給へ。」と道雄も促すので、急に馬車を用意して、津村新夫婦は新橋へ出かけることゝなつた。

道雄は一先自邸へ歸つて、待つことゝして、その成績は電話でと定めて、これも同時に車で、麻布の自邸へ急がせた。

馬車は右へ、車は右へ別れて、紅葉館前まで来ると、道雄と探違つた一輛の車がある。先方の客は婦人、見るともなく、眼をはると、白熱燈の光で、外向けた顔は確と見えないが、奈うも五百重子に似てゐるやうだ。

「おい車や、今爰で行違つた車の後を尾けて呉れ。」

車上で道雄が、怒鳴つた。

「へ、今の。」

「うむさうだ。」

車はまた紅葉坂を下りる。

(三十一) 危ない

馬車が新橋へ着いた時には、今二三分を餘すのみであつた。この流車は横濱止りといふので、客も多くはない。

津村夫婦はそれでも間に言つたので、兎に角横濱までなら行つてもいいから、この汽車へ乗込まうと定めた。で慌て、切符を買つてプラットホームへ出ると、百合子がゐる。初めて百合子が爰へ来てゐることに心注いたが、驛夫が急立てるので、横濱まで行くことを簡短に語つた。百合子は見送人として爰まで退入つて来たが、奈うもそれらしい人に會はないといつてゐる。

二人は乗込むと、直ぐ發車だ。

車は走つて、品川へ五分の停車である。

もしやと思ふので、五つばかり繼がれた箱を、一つ一つ探さうといふので二人は

室を出て、プラットホームへ立ちながら、「爰にもゐない」と見て歩く。

「津村君」と春後で聲がしたのを、直子は聞付けて、其方を見ると、意外にも狩間

道雄が、矢張自分等と同じことをやつてゐるらしく、其處に立つてゐた。

「あら、貴下奈うして」と直子が傍へ寄ると、夫の欣も心付いて、近付き、

「狩間君、何うしたんだい。」

「いや君、大變なことを、といふのは外でもない。實はね、君と別れて、紅葉館の前まで行くとき、一輛の車と擦れ違つたのだ。それが氣の故だか何だか、何うも五百重子のやうでならないから、爰まで追はせたんだがね、混雜に紛れてこの婦人を見失つたのだ。」

「わい？、さうすると、品川から乗つたんだな、では何方もちこの汽車だね。では探せるよ、何の、もう袋の鼠だ、何處へ行くものか。安心し給へ。」

「ぢやあ、いよくこの汽車なのね、狩間さんも横濱までお出になりませんか。」と直子は道雄を見る。

「さあ、間に合へばいいですが、見送りで来たから、これから切符を買はなければ。」

「さうね、困りましたわね。」

といふ折しももう發車と見て、ばたん／＼と扉を締め出した。

二人は慌て、もう出るのね、と手近の室へ飛乗る。

「では、何分。」

「あゝ、それなら、屹度い返事をするからね、楽しんで待つてゐ給へ。では失敬！」

「失禮いたします。」と直子も會釋する。

道雄は別れて、四方を睥はしてゐると、汽笛と共に動き出した。

津村の乗つたより二つばかり後の二等室に、例の道雄が追駈けた婦人は乗つてゐる。道雄は思はず駈出して、前の箱へ爰にゐることを知らせやうと思つたが、もう進行が早くて逆も間に合はない。

思切つて、「もし／＼」と走る窓に取付くと、態と海の方を向いてしまふ。

「危ない／＼！」

「これ、何をする。」

と二三人の驛夫が飛んで来て道雄を抱くやうにして、窓を放させた。

道雄は、我を忘れて、去り行く列車を見送つてゐたが、最後の赤い灯三つすら、もう見ゆすなつてしまつた。

一人遅れて、ブラットホームを去つた道雄は、もう萎れきつて、早々車夫に歸邸を命じた。

十時過ぎ、麻布の自邸へ着くと、何となく不穏な容子で、二三輛の車や、提灯が見ゆる。さて何だらうと、これにも胸を蕩かせた位。不審を抱きながら、車を下りて、玄關へ這入ると慌しく書生が出て来る。

「何かあつたのか」と心配さうに道雄は聞いた。

「はい、少々議會の方のことで、唯今盛岡子爵がお出でです。」

「それだけか。」

「まだ二三人のお客様でございます。」

「さうか」とつゝと奥へ這入つた。

(三十一) 艶な文

間もなく電話があつた。横濱からで、「残念」の一言であつた。

奥の十疊の間には、今何やら密談が初まつてゐる。

主人の狩間侯爵の前に、盛岡子爵が坐つてゐる。この側には、二三の洋服紳士が扣へてゐやうといふ始末。道雄は黙つて、二階の書齋へ這入つた。

卓子に靠つて、呆然と考へ込むでゐる處へ、執事の岩崎といふ男が這入つて来た。

「若様、お歸りでございましたか。」

「お、岩崎」と吃驚した眼色。

「あの若様、夜中甚だ恐入りますが、」と四邊を睥はして、少し聲を低め、「少々お寢

「ひ申したいことがござりますが。」

「何ですか。」

「他の事でもないのです……その、若様のことには就きまして、何うも思はしいことを耳にいたしましたな。」

「思はしいことは。」

「外のことでも御座りませんが、その、近來……若様に左様のことがあらうと思ひも寄らんことでもござりますが、圖らずもある筋から、私の耳へ道入りました。」

「へ、そんなことかしら。」

「その、若様が、近來よくお外出をなさります、そのことで、へ、へ。」

「何だか解らないね。」

「お思當りはござりませんか。」

「なければこれに越したことはないのでござりますが、扱て、『一寸考へ』何うも怪しからん。』と、道雄の顔を見てゐる。」

「何か怪しからんことでもあるのかしら。」

「へ、この、御存じなければこれに越したことはありませんから申上げますが、實はな、私が少々妙な方面から、妙なことを聴きました、と申しますのは、若様に對して餘り不敬過ぎる話でござりますが、それも事實さうなれば格別、ないとするは少々名譽回復を致さなければならぬのでござりました。」

「どんなことだい。」

「あの、若様、何でも新橋とやらの藝妓と深くおいひ換しなされたとかで、その藝妓が非常に……その、若様のお胤まで何ださうだといふことを聞きました。」

「は、へ、何だ馬鹿らしい、何のことかと思へば、下らない……。」

「下らないことでもござりませんで、御前のお耳へも道入りましたことで。」

「お父さんへさうか。併し別段さういふ愛のない潔白なものだから、私は聞は
んが、一躰それは誰から聞いた話だ。」

「へわ、その、何だか存じませんが、賤しい女から、若様の許へ手紙を寄越しまし
て。」

「わ、手紙が？」

「へわ。」と恐る／＼、若様の様子を窺ふ。

「馬鹿らしい、何だつてそんな下らない手紙なんて、誰の悪戯だらう。」

「勿論、悪戯だらうとは存じますが、何に致せ、御前のお手へ遺入つてしまつ
たものでござりますから。」

「そんなことは、奈うでもいゝが、奈うして……そんな。」

「あの、先刻でござりました、何でも御門を這入つて玄關へ参つたものがあるの
で……へわ、誰だかは存じませんが、土橋（書生）の話に依りますと、車夫林の男

が、手紙を持参いたしましたして、これを差上げてとばかり、一目散に逃げるやうにい
たして出て参つなさうで……土橋は何の氣も注かず、早速御前の處へ持つて参つ
て、お机の上に乗せて参つた、それが、矢張御前も上書に若様のお名前のないも
のでござりますから、封を切つて御覽になりますと、こは奈何、艶かしい女の文……
……しかも、泣ごことが書いてあるとこのことでござります、一寸御前からお窺ひ申し
た處によりますと、それで内々容子を若様に覗ふやうにこのことだ。」

(三十二) 不返辭を！

道雄に、新橋の何々といふのには、心當りもないことではない。さりとて、今手紙を
寄越されるやうな覺はないので。

先月の末に、ある宴會があつた。その時少々呑めぬ酒を無理して、仆れたことか

ある。

何くれとなく世話して呉れた、新橋の逸物波子といふ少々な名刺の主とは、その後二三度逢つたことがある。併し、そんな手紙を寄越されるやうな關係もなし、また先方も、そんな手紙を呉れるやうな女でないと思つてゐる。

道雄は合點が行かぬ。さういふのがある爲めに、五百重子が姿を隠したのでないかなど、執事の岩崎にいはれると、殆んど當惑してしまふのだ。翌日一日考入ひだ。

どんな手紙であるか、一つこの手紙を見たいのだが、父の侯爵が廻つてゐるのだから、見せて貰ひたいともいへぬ。

翌日何思つたか、急に車を用意させて、新橋へ走らした。

鳥森は湖月の奥、もうかれこれ常燈に灯の遣入つた頃、差向ひで何から密を話し

てゐるのは、道雄と波子である。

『ではいよくお前の仕業だね。』

『わゝ。』と濟してゐる。

『何故、あんな馬鹿な眞似をするのだ。』

『何故でせうね。』と空々しくいつて、ほゝと笑ひ。

『冗談ではないよ。』と道雄は益々眞面目だ。

『狩間さん、野暮いひつこはなしですよ。餘り甚くお見限りだから、羨しや會ひたくてさうしたんでさね。』

『それを何故また、態々親父の手へ渡さうと思つたんだ。』と憤としていふ。

『だつてね、貴下も解りの遅い人。唯来て下さいで貴下が出て来る人？さうでないから、あゝして釣つたら、乾度怒つて何故あんなことをして呉れたと、おいでばらうと思つて……ほゝ、釣られたんですよ。』

「人の悪いことをする、さうして何時私がお前と深い約束をした。」
「これからするんです。」

「馬鹿いふな。」

「馬鹿いひますとも、よござんすか、貴下は容子がよくて、思ひやりがあつて、お金があるから、妾が惚れたんぢやありませんか。」

「下らんことは聞きたくない。」

「聞きたくなけりやお聞きなさるな。妾も波子でさ。惚れた男を放すものか、いふだけのことはいひますよ。」

「もうさ。」

「いゝわ、よくない。奥様でも出来られた日にや、何うして〜、かうして逢ふことも能やしないもの。今のうちに話して置かないぢや……。」
「もうよせ。」

「よさない。」と疑と道雄の顔を視る。

「もう、それだけ聞けば用はない、其方で何う思つても關はない、此方は此方、通り一偏のお客に、一々お前のやうに惚れてゐたら、商賈になるまい。」

「いゝわ、通り一偏のお客たあ違ふんです。妾はね、今日何うあつても聞いて頂きたいことがあるの！よござんすか、今日まで幾何思つてゐたつて、貴下が一人で妾を聘んで下すつたことがないから、やき〜思ふばかりで、この胸を明すことが能ないんですよ。ね、貴下、些とは不便と思つて下すつても、罰は當りますまい、狩間さん。」

道雄は當惑げに、もじ〜してゐた。

「狩間さん、此方をお向きなさいな、妾いふことがあるから。」

「もう解つた、解つたよ。」

「解つた？」

「うむ。」

「あ、嬉しい、流石は狩間さん、……道雄さんですね。」と覗込む。

「もう、それでいい。私はこれから歸るから……」と立ちかける。

「歸る？まあ、憫れたもんだ、實意がなさ過ぎらぬ。解つたら、返事を、お返事を、覗いませうよ。」と道雄の袖を執る。

「解つたといつたらよからう、放せ。」

「解つたら返事として下さいな。」

「返事……。」

「わ、返事を。」

「困るなあ。」

「何も困ることは些ともありません。」

「それが困るよ。」

「今日は返事を聞かないうちは放さないからい、や。」

「まあ放せ。」

「お返事を。」

「放せといふに。」

「お返事を。」

「するから放せ。」

「仰有つたら放しませう。」

「困るなあ。」

「その手は食べませんよ。さあ。」

(三十三) 種橋の女

二三日の後、新聞紙は、狩間道雄は五百重子の行方不明に、八方探して探し抱む

だ決果、不圖した處から、新橋のさるものに馴初めて、今では水も漏らさぬ仲と報じた。

今日は恰度、黒井時雄が出發すること、津村欣一が再度渡米といふので、午後二時に横濱を出帆する香港丸は、見送人がその大多數を占めてゐる。

甲板の上では、黒井、津村の新夫婦二組を初め朝野の紳士が、新夫人の縁故と稱するものまで、賑やかである。道雄はそれこれの世話に忙しい。

黒井は陸軍大尉の軍服で、百合子夫人と並んで立つてゐる。

「やあ、何うも、色々と有難存じましたな。狩間さん、まだそのお禮も申さんければならんのですが、兎に角急にかういふ事になつたですから、」と頻りに道雄に謝してゐる、時雄の口に尾いて、夫人の百合子も、

「何うも……あの、五百重子さんは何うあつてもお捜し申さなげりやならないんですのに。……何卒悪からず……彼國から、早く五百重子さんの行方の知れるやう

祈つてますわ。」

「いや、何ういたしまして、」と道雄は少し而喰つた顔色である。

津村夫婦も爰へやつて来て、色々その骨折を謝してゐる。

「あの狩間さん、五百重子さんが、見付かりでしたら是非御一緒にお出なすつて下さいまし。お待ち申してをりますわ。」と直子も口を出す。

「あ、君、一寸……」と津村は道雄を招いて、小陰へ行つて、「實はね、君、あの新聞に出てゐるやうなことは、僕は餘程以前から一寸く、と耳にするが。」

「あ、下らない、」と笑ひに紛らせる。

「や、下らないことには相違ないが、五百重子さんが、全くこの世を去つてをられる理由でもないのだからよくまあ考へて、世間の口に登らないやうにね。」

「いや、色々御心配をかけたね、それには深い理由もあるのだが、こんな處でもない……もう出帆に程もないから……兎に角、御忠告は有難い、決して忘れない

よ。

『あの波子一件はそれで君、實事なのかね、新聞にあるのは、』と津村は怪訝な顔をする。

『まあ、事實として置かう。』

『わい？さうか。君、頼むよ。僕も一週間ばかり仕度で社へは出なかつたから委しいことは知らないが、妻なども噂を聞いて心配して、男といふものは頼みにならないものだなんてね、半ば信じてゐたから、僕は馬鹿いへ、狩間君がさういふお樂筋の出来る人間ぢやないつていつてやつたが、さうすると、根のない山ぢやないね。』と憫れる。

『まあさうだ。』と苦笑つて、道雄は聲を一層低くし、『五百重子の在家が略知れたよ。』

『さうか、それはいい、按配、それなら尙更、彼方の方は早く手を切り給へ、僕がも

う少しあると、仲へ這入るんだが残念だな。併し君、あゝいつた方面は存外容易なものだよ。曰くこれだからね。』と指で環を拵へる。

『あゝ、處が、君、五百重子は又、其方の……何なんだからね、一寸面倒だが。』

『わい？其方の……五百重子が藝妓にでもなつてゐるのかい。』

『さういふ理田でもないが。』

この時出帆を知らせる銅鑼が鳴る、もう二時である。

一同の見送人は解船へ乗り移る、道雄も一行に別れて、本船を離れ、棧橋から、すつと上つて來ると、其處に一人の婦人が立つてゐる。

『一寸、狩間さん。』

『おゝ、波子、何うしたんだ。』

『貴下を待つてたの。』

(三十四) 捜しましたよ

辨天通の唯ある旅館の一室。二人の婦人が密談中である。

「それでも、終々世間の噂になつてい、按配ね、」と莞爾としたのは、二十二三の若い、従容な令嬢風のだ。

「わ、で、今日は旨く貴嬢にお目にかゝらせるとも、何ともいはず、唯いものを見せるからつていふんで、待たせて置きました。」

「それはい、按配ね。で道雄さんも妾のすることは御承知なされたの。」

「わ、もう二つ返辭……ほ、あの妾がお口説き申して……色仕かけには却々に乗りなさないんでございませう。それがもう、智慧を有つただけ絞つて、浮名を立てる今日までにや、却々大變でございませう。」

「さう、御苦勞様だつてね、旨く行くかと思つて随分心配したが……ほ、あの

手紙が利いたの。」

「わ、よく利きましてすよ。ほ、これは却々、妾の立場つていふのは、初め惚れたで、口説いて、それが旨く行く今度は、實はこれ／＼つて、種を半分分して、それからもう世間の噂を立てさせて置いて、……まあ、狩間さんがあゝいふお方でしたからいゝんでございませうが、これが並の方ですといふと、妾が……眞箇に來たりなんかした日にや、それこそ大變、ほ、いふ容子を見ると、何うしても唯の代物ではないやうだ。」

令嬢の方は飽まで落着て、「ちや、一つお目にかゝつて置ませうか。」

「さういたしますと、一足お先へ參つてをりませうか。」

「い、わ、一緒に行きませう。」

これから仕度をして、令嬢はその女と一緒に出かけた。

「妾も随分いろ／＼な眞似したわ。」

「さうでございませうね。」

「まづ最初に、車夫を引く落して置いて、それから一寸したことから、波子さんのことを聞込むで、一度でも二度でも顔を知つてゐる處へ持込まなけりやならないからつていふんで、貴女を口説いて、ほ、ほ、あんな手紙で侯爵一家を欺いて、それから世間を欺いて、一つのことをするには大變ね、かうして土臺が能て、さあ、い、といふ段になつて、貴女の方へでもあの方が向いてゐた日にや、眞箇に馬鹿を見るわ。」

「ほ、ほ、そんな……あ、いふお方が何で妾風情になんか……かういふ貴嬢といふ方が在つしやればこそ、あの方だつて諾といつて、妾なんかと浮名……ほ、ほ、世の中は面白いものだこと。」

「さうでもないわ。」

「お嬢様のやうな方は、格別面白いでございませう。」

「何うして、しなくてもいい苦勞が大變だから、ほ、ほ。」

「その御苦勞が何うして、花が咲いて實がなりますから……。」と、立留つて「あ、話してゐるうちに、まあ、何時の間にか。」

「あ、爰なの。」

二人は小意氣な料理店へ這入つた。

飛石傳ひに、椽側から上つて、二人とも障子を開けて中へ這入る。

其處には待他むたといふ風に横になつてゐた男。急ぎ起直つて、四角く坐る。

「狩間さん、さあ、珍しいもの。」

「道雄さん。」と令嬢は男の顔を見た。

「やあ、貴女は、」と愕いたらしく、男は此方を見て、胸の沈まるのを待つらしい態度である。

「久濶でしたわね。」

「奈うも……。」

「色々御心配を……。」と令嬢は俯向く。

「いや、捜しましたよ。併し、貴女が今お來にならうとは實に意外でした。」
「狩間さん、何かお禮をなさいなね。」と傍の女は、一寸男を睨むた。

(三十五) 粹な父侯上

盛岡邸の奥坐敷で、今話してゐるのは、主人の子爵と、狩間侯爵とである。

「奈うしても知れんといふ筈はないのぢやが、奈うも、時が過ぎると、人間といふ奴は熱の醒めるものでな。」と子爵は頬を続ける。

「さうぢや、兎角熱心にならん。宅の道徳なども、この頃はさつぱり貴下の處のことといはんやうになつて、はゝ。」

「いや、お若いうちには殊にさうぢや、お互に若いうちのことを考へると、はゝ。」

「さうぢや、併し、何うも宅のも、近來何うも品行が面白くないのでなあ、少しいふてやらうとも思はんではないが、何にせむ、もう三つ子でもなし、多少道理を辨へることぢやから、今に、お宅のでも歸られて、まあ一緒にしたら、何うかかうか無事に行くぢやらうと思ふが。」と公爵は鬚を撫でる。

「さうぢや、處が、宅のも手がかりといふのが皆無ぢやから、さう若いものを便やと待たせて置く理由にも行くまい、何うぢやね、一つその、本人の迷つとる奴とかいふのを自由にさせたら。」

「さうはいかん、兎に角此方との約束はあることぢやから、生死の解るまでは、道徳を待たせて置く。」

「さうか、併し、道徳先生却々夢中ぢやさうなでな。」

「はゝ、何うも困るて、私もいはふと思ふが、社會に立つ上から、多少さういふ経験もなくてならんし。」

「それはさうぢやが、聞ひは何でも先方も充分真心から出るとやらぢやし、それに此方も熱中しとるのぢやから一緒にしてやる方が爲ぢや、は、われ／＼の若い時を思ふと、何うしてもさうぢやな、宅の五百重子なども、多分それがあつて、そのかされたものと見わたると、よし、今歸つて來ても、些と差上げるに失禮ぢやかな。」

「いや、さうでない。」

この話が奈う纏つたか、侯爵は歸宅の後道雄を自分の室へ呼んだ。道雄は多分もう例の世評通りのお叱言であらうと豫期してゐた。

「今お呼びでしたか。」

「うむ、道、もつと此方へ奇れ。」

「はい。」

「奈うした、大分疲れとるな、と苦笑を全身を注いで、侯爵は道雄を見成つた。

「はい、昨日來、友人を送つたり、その他……用事が種々と重なりまして。」

「さうぢやらう、昨夜も見わたつたな。」

「はい。」

「何處へ行つた。」

「横濱へ参りました。」

「さうか、楽しいことでもあつたか。」

「いや、別段。」

「別段あつたのか。」

「奈ういたしました。」

「さうか、宜しい、就いては、お前も、もう三十三ぢやな。」

「はい。」

「少しは何を確定した一生の事業でも考へたか。」

「はい、少々考へて見ましたが。」

「さうか、奈ういふことぢや。」

「政治の方で。」

「政治と、ふゝゝ。」と鼻の先で笑つて、「それで、あの盛岡の方もあの儘になつて、今以て、五百重子といふ淫乱娘の行方が知れん。」

「わゝ、何です？」

「いや、淫乱娘の行方が知れん、お前もあゝいふ女はもう要るまい、な。」

「いゝわ、奈ういたしました。」

「いゝ、解つゝる、處で一人女房を貰ふてやらうと思ふのぢや、他に、政治家に適當した女を、な、よからう、年の一つや二つは多くても難はない。」と笑つてゐる。「御冗談は何卒」と少 道雄は困る。

(三十六) 同じく下

「處で、色々扱して見た處が、いゝのが見付かつたぞ、悦べ。實に政治家の女房には最も適當しとる奴ぢや。」

「お父さん、御冗談はもうお歌めなすつて下さい、今の處、私は妻の必要……五百重さんが、まだ知れないのですから。」

「いゝや、解つゝる、その邊はこの親父も呑込むぞ。あんな淫乱娘などは詮方がない、それより、別嬪で、心だてがようて、お前に惚れとつて、お前も亦惚れるといふ女を見付けたぞ、お前を大切に……はゝゝ、奈うぢや、貰ふ氣はないか。」

「何卒お父さん、少時お待ち下さい。」

「何も待つことはない、明日にも定めてやるから、心配せんでいゝ。酒の相手が上手で、三味線が弾ける女房が嫌ひか。」

「……………」

「は、好ぢやらう。」

「もう……………」

「は、何もさう喋がんでおね、心配は要らん。それより五百重子の方を断念したがいて、あ、いふ不埒な奴は後の爲めにならんからな。」

「お父さん、決してそんなことはありません、五百重さんは……………訖度何か事情があつて隠れたのですよ。さうでなくては。」

「もうい、あんな女の肩を有たんでもい、でないわ。立派な、世間に出して辱にやらん女を嫁にした方がい。」

「併し……………」といひかけるを遮つて、

「い、この親父が呑込むぞ、秘さんでも何うせんでも、お前の恥を拭ふて呉れるから心配はいらん、昨日、な、ある處から申込むで来たのぢやが、非常に面

白い口ぢやから、無論お前に相談なしに返辭してやつたか、差支はないなあ。」

「わ、何ですつて？」少し道雄は愕く。

「解らん男ぢや、ある處から嫁に来るものがあつたのぢや、それで、私が早速貰はう、悴は無論承知ぢやと、かういふてやつたのぢや。」

「は、それは、眞箇ですか。」

「嘘はいはん。」

「困りますな。」

「困らんでもい、必らずお前の氣に入らんものは来んよ。」

「一躰それは何處です。」

「何處でもい、が、貰ふぢやらうな。」

「今の處……………少し。」

「いや、大丈夫ぢや。」

「私には少し都合が悪いので。」

「いや、都合はいいのちや。」と川處までも存込むのであるので、道雄は何となく不安で、少時考へてゐた。

「は、は、は」と親父の候爵は空を向いた。

「お父さん、何故、私に御相談下さらなかつたのです。」

「相談も絲瓜も要らんさ、お前の好く女を貰ふのちやから。」

「處がその。」

「理屈はいはんでい。」

「私の不承知なのですから……何處です、これから行つて断はつて來ますから。」

「不承知なことはない。」

「い、わ、お父さんが承知でも、さうは行きません、何處ですか、教へて下さい、これから私は。」と急込む。

「急くな、まだ定めはせん。」

「でも……何處です。」

「新橋の琴桔梗の波子といふ妓ぢや。」

「わ、？」

「は、は、断つて來てもい、ぞ。」

「お父さん、それは……何です……私、はそんな。」

「い、い、いふに、解つとる、貰ふてやる。」

「い、わ、お父さん、貴所は……私は……あ、困つた。」

「い、辯解はせんでい、といふに、知つとるから、は、は、は。」

道雄は無言で、少時當惑さうに父を凝視めてゐた。

上野公園の夏は格別である。

涼しい風が繁つた梢を吹いて、四邊は何となく神々しい夕まぐれだ。二人の男は何やら話しながら、納涼の群から離れて、大佛の處へ昇つて来た。

「さうかね、へへ。」と一人の髭のある方が、浴衣の袂から巻蓑を出して火を點ける。

「何しろ、君がそれを知らないのなどは、些と迂遠過るな。」

「いや、實際今日まで知らなかつた。」

「あの波動的の落籍される一件に就いては、侯爵が非常な盡力だささ、驚いた粹な親父ぢやないか。」

「さうだな、僕もさういふ親父が一人欲しいものだね。」

「は、君もさう思ふかい、寧ろ息子の方がその唐突なのに驚いたさ。さうだらう、僕の探索した報告をさうなら、侯爵か息子の波動的が熱心であることを知つて

それから二三千の金を投出して、これでいゝやうにしる、その換り、淫逸な盛岡の娘は、もう出て来ててもこの狩間家へは入れられぬと、太した親父さね、すると息子の道雄先生、今更らしく五百重子に未練が出て、波にしやうか、五百重の山にしやうかと、心は二つ身は一つといふお定まりの岡々中だ、何しても面白いことになつて来たさ。」

「さうかい、さうすると可愛い波ちやんも根引きが能きがたいのだね、は、いゝ、いゝぢやないか、僕ならかうするさ、先づ波動的を根引して、手植の庭松にしなくとも自前で稼がせて置いて、間夫を氣取つて時々行つちや轉つて来るさ。さうして五百重子の方が目付つたら、此方をお庭の石燈籠にして、樂に食へる倉の番をすらあ、奈うだ、利口に働けば、色男は徳なものさ、兎角華族なんといふものは馬鹿なものさ、は、は。」

「處か、君、われゝのやうな社會なら、間夫氣取りで、自前の稼ぎをさせて置くこ

「こが能もしやうさ、處がそれ、其處が華族さんの弱点で。」

「さうか、成程、華族といふものは、窮屈なものさね。」と、髪は灰を吹き飛ばす。

「何しろ面白いことさ。」といひながら、髭のない方は立飽むで、「奈うだい、少し涼しくなつて来たから、徐々下へ行かうぢやないか、ね。」

「うむ、さうしやう。」とこれも立上る。

「何しろ、さうなると一寸人間といふものは迷ふから。」

「すると、矢張心から、波式に迷つちやるなかつたのね。」

「さうと見ゆるよ。」

二人はこんな話をしながら、大佛山を下り、東照宮の方へ歩を向けた。

空車が二輛、大きな聲の世間話で行過ぎる。これも亦、この話らしい。

「すると何かい、いよ、落籍して若旦那が女房にしやうつていふんだな。そいつあ酷いや、」と京橋組合の提灯が不平顔だ。

「よくは解んねねがな、新橋ん處でそのお客は下りたんだが、相棒の野郎が知つてやがつてな、うむ、そのお客をさ。それから俺の色んな事を聞いたが、多分明日あたりあ、新聞に出るだらうて、其奴がいやがつた。」

「大變委しく其奴あ知つてるんだな、方々から聞いて来たんだらう。」

「それが面白へんだ。」と芝組合の方は、一寸棍棒を持換へて、「其奴がな、知つてるんで何でも華族の邸の抱への男があるんだ。で話を委しく聞くと話見てねよ。昨日とかだ、執事の何とかいふのが年甲斐もなく、新橋の藝者屋へ曳込ませたんでな、不思議だつてへんで聞くとその話よ、そいからこの話に滿更他人でね、昨日の相棒に話したんだ。は、又聞きでも慥かよ。」

「さうか、で、昨日のお客は。」

「それが、その華族の處の支關にあるんだとかだ。何でも二三日一家總出で新橋へ懸合つてるんだとよ。一人女房持つにや、大變な騒ぎよなあ。」

と二人はがらく山の方へ下りて行く。

(三十八) 覺悟の躰

三十軒堀の唯ある待合の二階に、しんねこに語る男女がある。男は四十近い、有
福らしいので、女はそんな其處等のしれものといふ格だ。

少し甘むる鼻聲で、男に顔を覗きながら。

「ねね旦那、何とか返辭して下さいね。爰の處で一つ踏張つて下さるなや、妻が
彼方へ取られてもいゝの、男の下るぢやありませんか。はきくいなさいなね。」

「はきくしてゐるさ。併し爰の處、困るんだよ。」

「困るんだなんて愚圖くしてゐた日にやあ、妻は彼方へ行かなさやならないんで
すよ。貴下はそれでいゝかも知れないけど、妻や可厭ですよ。華族だなんて四角張
つた處へさ、奥様なんて、死んでも可厭だ。」

「困つたなあ。」

「俊さん、男ぢやないか、それとも妻を捨てる了簡なのかい。さうでもないの？そ
んなら妻や……。」とほろりとする。

「たつて、今二千圓といふ金が……。」

「貴下のやうな人がそんなことをいつてちや詮方がありやしない。それあ、華族さ
ん——侯爵様の若様と競走だもの……貴下、妻や外に頼みがないんですよ。かうし
てゐれば、明日が日にも彼方へ行かないぢやなりやしない。さうしたら可厭でも、
あの浮氣者の氣障な男の女房にならなさや……あゝ、いやだく、こんなに思ふよ
りや、一層一思ひに……、頼みにならない俊さんは、唯二千圓のお金が……惜しい
やうな……當の外れた男だし、奈うしたものだか……。」

「そんなに早く定まつたのかい。」

「何だれい、空惚けつこなしでさね。こんなに人に口を酸くさしといて、まだそん

な……だから、早くして呉れといふのぢやありませんか。男らしくもない。妻やいななにいふのも、貴下の爲を思ふからさ、妻の慾でいふんなら、こんなことは……惚れてる女にこれ程いはれて、それで、兼子俊三の男が立つの？東京で二三と下らないお金持の貴下でもない、唯二千圓で男を立てよさ。」

「もう、さう苛責めて呉れるな、今考へてるんだから。」と男は思案してゐる。

「考へてる境ぢやありませんよ。妻の身が死ぬか生きるかの際になつてよさ、考へてるなんて人間がありますか。馬鹿にしてらあ。俊さん、それとも眞箇に私……他さたんでせう、かういふ女が可厭なんぞせう。」

「そんなことがあるものか。」

「い、わ、さうなんだよ、覺ておいでなさい。私や悉皆騙かされたんだよ、かういふ薄情な人たあ知らずに、心中立して惚込むでさね、……あ、もうこんなことなら一時も早く……もう、俊さん、妻や何もいひますまい。お金で救へる命を、お金を

持つてゐながら見て濟すなんて方には、見せしめの爲めに、妻は見事に死んで見せるから、その意でおいでなさい。」

「……………」

「いね、さうしやうく、その方がい、こんな苦勞して、可厭な男に買はれる位なら、色男の前で死んで見せた方が、餘程増しさ。」と、覺悟したらしく、屹と男の方を見て「俊さん、長々お世話様でした」と、立上る。

「お前何處へ行く」と驚いて押へる。

「定つてますよ。」

「まあ、少し待て。」

「そんならお金を出すの？」

「併し今の處。」

「ぢやあねわ、かうしませう、俊さん、一緒に死んで下さい、二人で……情死さ。」

「そんなことがい」

「それちや二千圓。」

「困つたなあ。」

「貴下が死ななきや、妾ひとりでお先へ行きませう。」と、既に決心の顔色を見せる。

「まあ、少し落着いて呉れ。」と拜むやうにして、「出す、出すから待つて呉れ。」

(三十九) 侯爵と競走

「ちやあ、出して落籍して下さる？」

「うむ、華族なんか金で敗けて溜るものか、俺が奈うしても引取る。」

「真箇ですか、それは……あ、嬉しい！それでこそ真箇の俊さんだ。」

「當然よ。俺だつて兼子俊三、世間へ對してお前を人手に渡しては、顔向けがならん。」

「さうでせう、況して、先方が華族とあつちやあ。」と油を注す。

「さうだ、華族に打付かつちやあ、俊三もから意氣地がないなんといはれて、それで黙つてゐられるもんか。」

「さうとも、妾だつて、今日まで血の道を上げて惚れてゐた男を棄て、華族といふお金や位に轉んだといはれちや、波子の名折れといふもんさ。さうでせう。」

唯二千圓で意地を見せて、その上華族なんて威ばつたつて、俊さんの腕と、波子の腹はこんなもんだつて處を見せられりや、妾いもんでせう。」

「妾いものだ。」

「さうして、何時までにして下さるの？」

「明日にもやらう。」

「懸合ひも何にも要りはしない、唯お金さへお母あ顔へ打付ければ、もう妾の縛は自由なだけだ、何しろ、今ん處先方が却々剛敵だからね、一時間を争ふんです。」

よ。

「さうか、何しろ、今夜は何方もち詮方がないから、明日の朝直ぐ、銀行から引出して、現金で耳を揃へて出してやらう。」

「さうく、さうすれば、先方の約束は明後日の晩方までに取引なんていつてるんだからね、その位にすれあ、安心さ。併し、世間ぢや驚くでせうね。あゝまで運び得る狩間の一件が、唐突に破れて、思も寄らない貴下の手……ほゝ、いゝ新聞の種だ。だげど此方は高見の見物、さうでせう。」

「ぐつと済してゐられるな。」

「さうしたら、明日直ぐ鎌倉が大磯へでも行きますか。」

「さうさな、それも妙だな。」

「それから、これは妾のこれから能る心配だけで、奈うでせう、奈うせ貴下は妾をお妻さんの手前宅へは運込めないでせう。」

「それゝさう。」

「ぢやあ、奈うして下さるの？」

「何處か異な處へ一軒有たせるさ。」

「お安くないんだね、お園者ですか。」

「さうだ。」

「だげどね、貴下、考へて下さいよ、月々百圓の暮しと見て……まあ費澤いつちや限りがないけれど、さう見て、奈うしても百五十圓は下さらないでせう。永い月日の間にや、貴下も却々大變でさあね。其處で、妾も兼々から考へてゐるんだげど、永い月日さう旦那にお世話をかけるよりやあ、一時幾か纏めて出して置いて頂いて、さうして何か仕ながら、大きく行きやあ、貴下の手助けをしながらいふやうな、目算なんだが、何うでせう。」

「それもいゝな、奈ういふことだ。」

「まあ……奈うせ堅氣な商法なんぞ能るもんぢやないんだから……まあ、宿屋か、待合か、何かさういつたやうな商賣がいゝだらうと思ふの。尤も一時澤山出すのが可厭だつていふんなら、何も妾だつて汗水滴らして稼きたかないから、猫でも抱いて遊んでゐても關はないけど、それぢや妾は樂でいゝが、旦那の爲めにやならないからね、それより一つ、お金の出し序に、此方の資本も卸して頂けるなら、後々の爲め、旦那も樂々……それも、それだけ頂戴して置かうといふんぢやなし、先の見れた商賣なんだから、月々幾何かづゝ、返して行つてもいゝ理由。さうでせう、ようくね一つ考へて下さいよ。かうした御縁になつてしまつたことだから。」

「それあ、俺だつて、その方が安心だが……一鉢幾何程入るな。」

「それもやり方次第だが、まあこの位もあれば」と片手を出して、「あれとあれとでまあ、少し足りないかも知れないが、後は後として、まあやつて見るにや、この位でいゝでせうよ。」

(四十一) 十錢の客

世の噂となつた、狩間侯爵の令息道雄が、二千金を投じて、正妻とするといふ波子が、計らざりき、今日突然、小石川の高利貸、兼子俊三といふ無分別男に落され、湘南地方へ避暑旅行と、各新聞紙の報じたのには、誰しも愕然として、少時間いた口が閉げなかつた。併し、狩間家を訪れたものは、平常と變りのない道雄を見るのである。

江の島の稚兒ヶ淵で、仲よさうに連立つて歩いてゐるのは、例の俊三と、波子である。浴衣姿で、浪打つ磯を漫歩き、よく小説の口繪にでもありさうな光景だ。「今頃は奈うしてるだらう」と波子がいへば、俊三は少し眼を尖らせて、「矢張未練があるな。」